



訴 状

2004年1月6日

東京地方裁判所民事部 御中

原告訴訟代理人弁護士	浅	野	史	生	
同	大	口	昭	彦	
同	奥	村	秀	二	
同	籠	橋	隆	明	
同	河	村	健	夫	
同	沙	々	木	睦	
同	島	村	美	樹	
同	古	川		美	
同	松	浦	由	加	子
同	幸	長	裕	美	

当事者の表示 別紙当事者目録記載のとおり
代理人の表示 別紙代理人目録記載のとおり

費用請求事件

訴訟物の価額 金559万0844円

貼用印紙額 金 3万~~6600~~円
4000

目 次

請求の趣旨	3 頁
請求の原因	
第1 当事者及び事案の概要	3 頁
1 当事者	3 頁
2 事案の概要	4 頁
第2 本訴訟の趣旨	5 頁
1 はじめに	5 頁
2 コトパンジャン・ダム建設の問題性	6 頁
3 財政上の問題性に対する弾劾	16 頁
4 小括	19 頁
第3 本訴訟の前提問題～ODAについて	20 頁
1 ODA（政府開発援助）	20 頁
2 日本国のODAの問題性	22 頁
第4 コトパンジャン・ダム建設を巡る事実の経過	26 頁
第5 コトパンジャン・ダム建設計画に対する現地住民の対応等	28 頁
1 経過	28 頁
2 被告らの対応等	32 頁
3 小括	36 頁
第6 コトパンジャン・ダム建設によって生じた被害	36 頁
1 住民の被害	37 頁
2 自然生態系の被害	42 頁
3 コトパンジャン・ダム建設による被害のまとめ	48 頁
第7 被告らの違法有責性	51 頁
1 コトパンジャン・ダム建設自体の違法性	51 頁
2 共同不法行為	59 頁
3 各被告らの有責性	60 頁
第8 被告らの原告に対する請求権	62 頁
第9 結語	64 頁

請 求 の 趣 旨

- 1 被告らは、原告に対し、金559万844円を支払え。
- 2 訴訟費用は、被告らの負担とする

との判決並びに仮執行宣言を求める。

請 求 の 原 因

第1 当事者及び事案の概要

1 当事者

原告 WALHI (Wahana Lingkungan Hidup Indonesia) 通称「インドネシア環境フォーラム」は、インドネシア全国規模の環境保護団体である。

WALHI は、天然資源及び自然環境の公正かつ持続可能なマネジメントを創生することを目的として、環境問題に関心を寄せる非政府組織 (NGO)、自然愛好団体 (KPA) および地域社会団体のフォーラムとして設立された。

1982年10月15日、ジャカルタに拠点を置く財団となった。その目的は、1. 生活環境発展の努力における非政府団体 (NGO) の役割を増進させ、このような大きな希望を全国規模で伝達してゆく。2. 社会の人々に、自らが環境を創造してゆく者であるという自覚を高め、資源利用の思慮分別のあるコントロールを進めてゆく、ことである。

常任委員会により運営され、代表者、副代表、書記、会計、役員 2名による共同代表の定めを持つ (規約 11条、14条1項)。

現在の共同代表は、代表者 Longgena Ginting、副代表 Joko Waluyo、書記 Nur Hidayati、会計 Anggiarini、役員 Muhammad Basuki Winoto、役員 Budi Arianto である。

WALHI は、その構成団体であるタラタック協会を中心に、インドネシアのスマトラ島中部に日本のODAによって建設されたコトパンジャン・ダム建設による住民の生活破壊・自然生態系の破壊に対し、1991年以来環境保護の立場から活動を行ってきた。

(2) 被告ら

① 被告国際協力銀行（以下、「JBIC」という）は、日本国の輸出入若しくは海外における経済活動の促進又は国際金融秩序の安定に寄与するための貸付等並びに開発途上にある海外の地域の経済及び社会の開発又は経済の安定に寄与するための貸付等を目的とする銀行であり、1999年10月、前記OECDと日本輸出入銀行が合併することにより設立された。

後記のとおり、OECD時代において、コトパンジャン・ダム建設にあたって、1985年、1990年、1991年の三度にわたり、インドネシア共和国政府に対し、円借款を供与している。したがって、1999年10月以前については、「OECD」、1999年10月以降については、「JBIC」と表記することとする。

② 被告独立行政法人国際協力機構（以下、「JICA」という）は、開発途上にある海外の地域に対する技術協力の実施並びに無償の資金供与による開発途上地域の政府に対する国の協力の実施の促進に必要な業務等を目的とする機関であり、コトパンジャン・ダム建設にあたって、事前調査、フィージビリティ・スタディ調査（実行可能性調査）等に関与した。

2 事案の概要

(1) 本件訴訟は、原告 WALHI が、インドネシア共和国の環境管理法38条2項にいう「特定の行為をおこなう権利」に基づき、1991年以降現在まで、コトパンジャン・ダム建設に伴う自然生態系の破壊を阻止し、また破壊された自然生態系を回復するために費やした別紙一覧表記載の費用合計〇〇円（平成15年12月〇〇日現在で1円当たり〇〇ルピアであり、日本円に換算すると金〇〇円である。）を同法38条2項の「実費」として、被告らに対して支払いを求めるものである。

(2) コトパンジャン・ダムは、インドネシア共和国スマトラ島中部に位置するリアウ州バンキナン近くのカンパル・カナン川に位置し、発電・洪水制御・灌漑・観光開発・養魚などを目的とする多目的ダムであり、高さ58メートル、堤長257.5メートルのコンクリート重力式ダムである。

(3) コトパンジャン・ダムは、1979年、東電設計株式会社（以下、「東電設計」という）がプロジェクト・ファインディングと呼ばれる援助案件探しを行い、JICAが開発調査を行うことによって、東電設計がコトパンジャン・ダム建設のプロジェクト全体の監理を受託し、OECDが総額で311億7000万円の借款契約を行ったうえで、1996年3月に完成され、1997年2月28日から本格的な貯水がなされた。

(4) コトパンジャン・ダム貯水池は、カンパル・カナン川とマハット川の合流地点から10キロメートル下流に位置し、地形上、バックウォーター域が広大なものとなっており、当初計画では、水没面積は、124平方キロメートルにも及ぶ予定であった。

そのため、これらの二つの川に沿って走っている国道と州道が水没するばかりではなく、多くの集落が水底に沈むとの前提で、およそ1万7000人～2万3000人の流域住民が、強制的に立ち退かされた。そして、この強制移住により、住民の伝統的生活・文化は完全に破壊され、移住先の劣悪な生活条件により、住民の生存・生活は危殆に瀕している。

また、同地域には、象・虎・バク・猿などの希少生物が生息していたところ、コトパンジャン・ダムの建設に伴う自然環境の破壊・生態系の破壊などにより、絶滅の危機に瀕している。

(5) コトパンジャン・ダム建設により、非自発的移転を余儀なくされ、様々な被害を被った現地住民は、コトパンジャン・ダム建設計画の立案・遂行等を行った東電設計・JICA及びコトパンジャン・ダム建設の建設費用を供与した日本国・JBICらに対して、既に原状回復のための措置及び被った損害の賠償等を求める訴訟を提起している（東京地方裁判所平成14年（わ）第19276号、平成15年（わ）第6732号）。原告WALHIは、東京地方裁判所平成15年（わ）第6732号において、日本国及び東電設計に対し上記実費請求をしているが、本件訴訟はこれら訴訟と一体としてJICA及びJBICに対しても上記実費を請求するものである。

第2 本訴訟の趣旨

1 はじめに

本訴訟は、従前より批判・現地住民の怒りと怨嗟の的となってきた日本のODAによる開発プロジェクトによる深刻な被害に関して、現地住民自身が主体となって、日本政府など関係諸機関の責任を追及する最初の訴訟である上記別訴と一体のものである。

ここでは、これまで「援助」、「開発」の美名の下に、現実にはどのような事が行われてきたか、どのような事態が生み出されてきたのか、それらによっていかに深刻な被害がもたらされてきたのか、これらについての赤裸々な現実が、現地社会への経済的・社会的側面への重大な影響の点から、また自然環境に対する破壊的な影響の点から明らかになる。

本訴訟の趣旨は、まず何よりもこのような破壊を弾劾し、被害者たる現地住

民を救済し、自然生態系の破壊を回復することにある。

また、さらには、本訴訟はODA問題に有する別の問題性をも剔抉し、これを弾劾するものである。すなわち、本件の如き誤ったODAを許してきた日本のODA政策の根本的非民主主義性・非国民主権性の弾劾であり、ひいてはODAの有する深刻な財政的問題性、すなわち、

(1) 一方での、対象国における膨大な累積債務問題と経済圧迫、およびいづれは現実化せざるを得ない債務キャンセル問題、

(2) 他方における、これと裏腹の、日本国における膨大な不良債権の抱え込みと財政投融资会計等の破綻の危機

についても、これを明らかにし、ODA政策の誤謬を弾劾していくものである。

以下、これら諸点について論ずる。

2 コトパンジャン・ダム建設の問題性

(1) コトパンジャン・ダムの今日の惨状は、東電設計によって作成されたJICAのフィービリティ・スタディにおいて架空の電力需要がでっち上げられたことに起因している。

フィービリティ・スタディ報告書では、リアウ州の人口密度は23.7人/平方キロメートルであるとしていたにもかかわらず、「急増する電力需要を賄う」ために、114メガワットの発電が必要だとしていた。その主な理由としては、将来ジャワ島からスマトラ島への「集団移住計画」が増大するにつれて電力需要が増えるとの仮説を用いていた。

しかし、「集団移住計画」には経済的・社会的・環境的な同題があることが、インドネシア内外の人権保護団体、環境保護団体などから指摘されてきた。そして、実際にも、スハルト政権の崩壊に伴って「集団移住計画」は中止されることとなった。

こうして、コトパンジャン・ダムの建設の前提条件が崩れてしまったのである。

(2) コトパンジャン・ダム建設への日本政府の円借款の供与に際しては、原告住民・インドネシアの非政府組織（以下、「NGO」という）である「インドネシア森林保全ネットワーク」、さらに日本の国会議員とNGO「地球の友」などにより、これへの融資を差し控えるよう再三再四にわたって申し入れがなされてきた。

この申し入れに際しては、もしも地元住民への電力供給ならば、5メガワット程度の小規模発電で十分で、114メガワットもの発電量が、なぜに必要な

のかとの疑問が提起された。また、「電力の大口需要は何か」との問い掛けもなされた。

しかし、JICA・OECD・日本国外務省はいずれも、こうした問いかけに答えることができなかった。それにもかかわらず、外務省は「リアウ州および西スマトラ州における電力需要増に対処するため」との理由を付けて、円借款の供与を強行してしまった。

この融資強行の真の理由は、スハルト政権への迎合にあったと見るほかない。そもそもコトパンジャン・ダム建設計画は、1979年に東電設計によって打ち出されたのであるが、それ以来久しく棚上げ状態になっていた。しかし、コトパンジャン・ダム建設計画は、1990年になって突然に動き出した。その理由は、スハルト・ファミリー

が、シナルマス・グループ、サリム・グループなどの華僑系財閥とタイアップしてスマトラ島、特にリアウ州で油ヤシ、ゴム、大豆などの農園を造成して、さらに、農園加工業の育成を計画し、その加工用電力を必要としたためであった。

そのことは、コトパンジャン現地においてコトパンジャン・ダム建設の推進役を演じた当時のリアウ州知事スエリプトが、スハルト・ファミリーの利益を実現するために、スハルトによって、リアウ州に派遣された国内大使であり、「パーム油工場、・・・合板、その他河川基盤産業を発展可能とするためには、地域社会が犠牲にならなければならない」と発言していることから、明らかである。

また、このダム建設そのものがスハルト一族のファミリー・ビジネスのためのものであった。たとえば、ダム建設に際して、付け替え道路の建設を受注したのは、スハルトの長女トゥットゥットの営む会社と彼女の夫インドラ・ルクマナ・コワラの営む会社であった。

しかし、スハルト政権が崩壊した今日では、ファミリー・ビジネスそのものが頓挫し、電力の大口需要は無くなってしまったのである。

- (3) コトパンジャン・ダムは、予定された電力の大口需要が無くなってしまった上に、今日、水位低下という深刻な問題に直面している。ダム貯水池に水が溜まらないのは、湖底に存在する断層ないしは染み込み穴を通じて水漏れ現象が生じているためと見られる。要するに、コトパンジャン・ダムは、欠陥ダムなのである。

このような水位低下のために、予定された114メガワットの発電ができない。ダム関係者の話では、17メガワットしか発電できていないとのことであ

る。実際にも、2002年2月24日～3月9日には、雨季の真っ最中であるにもかかわらず、夜11時から4時間の停電措置が講じられた。

(4) コトパンジャン・ダムは、今日、文字通り「無用の長物」と化している。このような存在意義を失ったダムは、撤去されるのが妥当であると言うほかない。

しかし、インドネシア共和国政府は、こうした措置を講ずることなく、114メガワットの電力が生産されているとの虚言を繰り返してきている。また、JBICと外務省は、現在、この「無用の長物」への公金支出を正当化するために、「民生用電力の供給に貢献している」と言い出している。

しかし、この言い訳は通用しない。民生用であるならば、単に送電幹線ばかりでなく、町村に至るまでの送電支線が張り巡らされなければならない。しかし、これまでに建設されてきているのは、パダン・ブキティンギ・バンキナン・プカンバル・ドマイを結ぶ送電幹線だけである。これに接続して町や村に送電する支線網は建設されていないのである。

コトパンジャン・ダムの建設が民生用電力の確保を主要な目的としたものでなかったことは、バルン村を眺めてみれば一目瞭然である。この村は、コトパンジャン・ダム貯水池のために陸の孤島の状態に置かれたばかりでなく、未だに送電線が敷設されていないのである。

(5) コトパンジャン・ダムは、発電収益の見通しが立たないことから、その建設コストを回収することができない。インドネシア国営電力公社は、現在、巨額の債務を抱え、事実上倒産状態にあるのであるが、その一因は、コトパンジャン・ダムにもあるのである。現状では、コトパンジャン・ダムへのOECD融資によって作り出された債務の返済は不可能である。「海外経済協力基金法」(1960年12月27日公布)の第21条第1項第2号では「その開発事業に係る事業計画の内容が適切であり、その達成の見込みがあると認められる場合」に融資することができると定めていた。コトパンジャン・ダムへの融資は、明らかにこの規定に違背しており、また資金の回収の目処も立っていないのである。

(6) コトパンジャン・ダムは、その当初計画がずさんであったために、単に114メガワットの発電目的が達成されていないばかりでなく、現地社会と住民に対しても多大の悪影響を及ぼした。

コトパンジャン・ダム建設のために、はたしてどれだけの住民移転が必要であったのかという基本的な事柄でさえも、未だにはっきりしていないのである。フィージビリティ・スタディでは、立ち退き者数として1万3907人という数字が掲げられていた。これは、東電設計が、このプロジェクトを「優良

案件」として位置づけるために、つまりこのプロジェクトの社会的影響を少なく見せるために、移転者数を過少評価したためであった。これに対して、融資当時、1991年4月、外務省は、住民移転者数として「約2万2000人」という数字を提示した。しかし、奇妙なことに、1994年4月に現地訪問した在インドネシア日本大使館総括参事官の目賀田周一郎は「約1万7000人」と報告した。この点、当時の現地紙では、2万3000人と報じられた。そのいずれが正しいのか、最も基本的な事柄でさえも、未だにはっきりしないのである。

このように、実際の住民立ち退き者数でさえも不明確なのは、一つには、インドネシア共和国政府が事前にしっかりとした人口調査を実施しなかったためと思われるが、もう一つには、東電設計が、このような不正確な情報に依拠したためである。その結果、立ち退き補償問題に大きな混乱が生ずることとなった。

東電設計のずさん調査はまた、予定外の人々に冠水被害をもたらすこととなった。フィージビリティ・スタディ報告書では、タンジュン村とパンカラン・コト・バル郡への冠水影響については何ら触れられていなかった。しかし、実際には、これらの地域は、ダム貯水池の造成により冠水影響を受けることとなった。タンジュン村では、ダム貯水池の造成により、45戸が水没した。これらの水没世帯への補償金は現実には移転住民には支払われず、代替地でさえも用意されなかった。また、350世帯が、一時的に冠水被害を被った。そのため、これらの世帯は、将来的な冠水の恐れを避けるために、高台に移転せざるを得なかった。しかし、この移転については何らの補償もなされなかった。また、パンカラン・コト・バル郡の場合にも、ダム貯水池の造成の悪影響を受けている。特に雨期にダム貯水池の水位が高まる際には、この地区の10ヵ村が冠水被害を受ける。

- (7) コトパンジャン・ダムの建設により立ち退き対象となったのは、ミナンカバウ系社会の人々であった。この社会の人々は、イスラム教を奉じ、母系制社会を形成している。村落の中心には、モスクとルマ・ガタン（「大きな家」の意味）がある。ルマ・ガタンでは、村落共同体の人々の集會が開かれたり、結婚式や葬儀などの行事も催されたりする。

ミナンカバウ系社会の土地所有の形態は、私有財産制度ではなく、集団土地所有制度である。この点で特徴的なのが、慣習的共有地(ウラヤット地)の存在である。ウラヤット地は、先祖伝来の入会地で、村落共同体全体の利用に供せられる。通常は森林として残され、ゴムの木が植えられる。その収益は、村落

行事に充てられる。また、新規カップルが誕生する場合には、この土地の一部が割り当てられる。

しかし、フィージビリティ・スタディ報告書では、こうしたミナンカバウ社会の特色には何ら配慮されなかった。そして、立ち退き住民は、ジャワ島からの移住者と同様に取り扱われることが提言されていた。このような取り扱われ方には、現地住民は、相当に抵抗した。しかし、スハルト政権は、現地に軍隊を駐留させて、こうした住民の抵抗を押さえ込んでしまった。その結果、住民は、2ヘクタールの油ヤシ農園ないしはゴム園に非自発的に移転させられた。移住地には、ウラヤット地もなければ、ルマ・ガタンもない。そのため、新世帯に割り当てられるべき土地の余裕もない。

また、政府によって提供された住宅は、ミナンカバウ系社会の伝統的建築様式である高床式の家屋ではなく、土間形式の粗末な木造住宅（縦6メートル、横6メートル）である。住民に言わせれば「これでは、まるでヤギ小屋である」というのである。しかも、ポンカイ・バル村、タンジュン・アライ村など、幾つかの移住地では、家屋の屋根は、アスベスト製である。健康への配慮さえもなされていないのである。

さらに、住民の意思を無視して政府によって建設されたお座りのモスクは、住民によって忌み嫌われている。例えばポンカイ・バル村では、モスクの方向が間違っているとして、その隣に住民の浄財で新たなモスクが建設された。また、リンボ・ダタ第2村では、政府によって建設されたモスクが住民を収容し切れないとして、その隣に住民の手によって新たなモスクが建設された。

このような移住地の状況は、ミナンカバウ系社会の独自性の否定そのものである。立ち退き住民の社会的・文化的独自性を無視して、「援助」の名において、「エスノサイド」（民族絶滅）—これは、「エスニック」（民族的）と「ジェノサイド」（集団殺害）の合成語である—の行為が行われてきているのである。

(8) 移住地では、ミナンカバウ系社会の伝統・文化が無視されているだけではない。住民には、生活手段も用意されていないのである。特にダム貯水池の周辺の移住地のゴム園では、政府によって約束されたゴムの木は、ほとんど植えられておらず、住民は、深刻な収入難に直面している。

このような事態が発生したのは、政府役人と請負企業の汚職のためである。つまり、ゴムの苗木を植える費用までもが、政府役人と請負企業のポケットに消えてしまったためと見られている。

1997年2月28日の貯水開始の時点では、住民の相当数が、立ち退き補償金を受け取っておらず、また移住地においてはゴムの苗木でさえも植えられ

ていないことは、公知の事実であった。それ故、コトパンジャン・ダム建設のプロジェクト監理を受注した東電設計は、補償問題が片付くまで、またゴム樹液が採取できるようになるまで、貯水を延期することをインドネシア共和国政府に提言すべきであった。また、資金提供者のOE C F、さらに外務省も、貯水を見合わせるよう進言すべきであった。

しかしながら、東電設計・OE C F・外務省のいずれも、このような態度を採らなかった。そのため、インドネシア共和国政府は、日本側の懈怠に乗じて、住民が移転した途端に生活難に陥ることを承知の上で、ダム貯水池に水を張り出してしまったのである。これは、まさに「緩やかな形でのジェノサイド」とも言い得る行為であった。

- (9) 日本のODA絡みで人権侵害問題が繰り返されてきているのは、一つには、先住民、少数民族などの社会的弱者に対する人権配慮基準がないことに起因している。もう一つには、「援助」プロジェクトに対する現地住民やNGO、さらにはタックスペイヤーなどの異議申し立ての声を吸い上げる制度が設けられていないことに起因している。

人権配慮基準という点では、JICAもOE C F(JBIC)も、未だに「先住民ガイドライン」と「非自発的移住ガイドライン」を策定していない。そのために、ODAプロジェクトによる先住民の生活基盤の破壊とか、現地住民の強制立ち退きとかの人権侵害の問題が頻発してきているのである。

しかも、日本のODAにおいては、現地住民なりNGOなりによる異議申し立てのメカニズムが設けられていない。世界銀行は、1993年に、「調査パネル」を設立した。これは、世界銀行融資プロジェクトによって被害を受ける住民が、環境・先住民・非自発的移住ガイドラインなどの業務指針の違反を、世界銀行に対して申し立てることのできる制度で、言わば被害住民の駆け込み寺ともいべきものである。同様に、アジア開発銀行も、1996年に、「調査政策」を採用し、パネル制度を発足させた。これらの制度は、必ずしも十全なものではなく、運営上の種々の問題点が存している。しかしながら、日本のODAには、このような制度でさえも設けられていないのである。

このような先住民・非自発的移住ガイドラインや調査パネルを設ける代わりに、OE C Fは、住民移転問題に関しては、1989年10月に策定された「OE C F環境ガイドライン」(初版)のうちにおいて、次のような一項を掲げるだけで、お茶を濁してきた。

「水没によって移転を余儀無くされる住民の生活状況等について検討され、所要の措置が講じられる必要がある。」

ここには、ダム建設プロジェクトにおいて、非自発的移住を伴う場合には「援助」を行わないという基本姿勢すら明示されていない。また、先住民、少数民族などの社会的弱者への配慮についても触れられていない。さらに、「土地には土地を」の原則も掲げられていない。

こうして、住民移転問題については、日本政府は、それが「援助」受け入れ国の国内問題であるとの言い訳をすることにより、ODAプロジェクト絡みの強制移住などの人権侵害の問題を見て見ぬ振りをしてきたのである。コトパンジャン・ダム建設プロジェクトの場合にも、外務省経済協力局長の川上隆朗は、国会答弁において、「すぐれて相手国政府の内政上の問題」であるという言い逃れをした。しかし、コトパンジャン・ダムの場合には、新機軸が導入されたことも事実である。日本政府は、インドへのナルマダ・ダム融資問題やインドネシアへのクドゥン・オンボ・ダム融資問題で味わった苦い経験を考慮して、コトパンジャン・ダムに関しては、円借款の支出のための前提条件として、3つの条件の充足をインドネシア共和国政府に求めたのである。この3条件については、日本国内では公表されなかったのであるが、インドネシアのジャーナリズムでは、次のような内容であると報じられた。①各々の世帯から移転同意を取り付けること、②各々の世帯から補償同意を取り付けること、③環境問題に配慮すること、特にスマトラ象の移転地を確保すべきこと。

「援助」受け入れ国に対してこのような条件づけが行われたのは、日本の「援助」実行の歴史の上からは初めてのことであった。他方において、これらの3条件は、インドネシア側では、円借款支出のための前提条件として受け取られた。そのため、インドネシア共和国政府は、住民「同意」が得られたということを取り繕うために、種々の画策を行った。

他方において、日本政府は、こうしたインドネシア側の姑息なやり方をバックアップするために、前記の3つの要求事項が、「条件」ではなく、単なる「要請」にすぎないと言い出した。こうして、折角の新機軸も、實際上骨抜きにされてしまったのである。

(10) 3条件は、単に住民「同意」という点ばかりでなく、環境配慮の点でも骨抜きにされてしまった。また、この点でも、OECD環境ガイドラインは、ほとんど遵守されなかった。OECD環境ガイドラインでは、「水力発電」の項目において、「施設の設置及び利用による生態系への影響」と題して、次のような規定が掲げられている。

「アクセス道路、ダム等の工作物の設置、貯水池の水質の悪化、下流流量の減少などによる集水域全体における主要及び貴重な魚類、動物、

植物への影響等について検討され、植生保全計画、緑化計画、貴重種の保全計画等の策定、維持放流量設定等の措置が講じられる必要がある。」

この規定は、旧態依然たる考え方の上に立っており、ダム建設そのものが、自然生態系の破壊（平たく言えば、「川殺し」）であるという発想の上には立っていない。そのため、「維持放流量設定」というような古臭い配慮基準が掲げられている。この点はともかくとして、この規定に照らしてみても、コトパンジャン・ダムの場合には、この規定そのものに違背する形で貯水が行われた。

まず第一に指摘しなければならないのは、樹木を取り除かないままに貯水が行われた点である。このような行為が、「貯水池の水質の悪化」を招くことは明らかである。そのため、現在では、貯水池に残された樹木が腐食して、水質悪化が進行しており、富栄養化現象が加速されている。すでに魚類の大量死という問題も発生している。

第二に、これらの樹木の残った浅水域は、ボウフラの恰好の生息環境を作り出している。この点でも、OECF環境ガイドラインの違反問題が生じている。なぜなら、同ガイドラインでは、「マラリア等の虫及び水を媒介とする病気の発生」と題して、次のように定められているからである。

「ダム等工作物の設置地域の病気のなかで、貯水池等の設置により病気の発生が著しく助長される可能性があるものについて検討され、必要に応じて予防計画等が策定される必要がある。」

コトパンジャン・ダムの建設にあたっては、マラリアなどの水関連の疾病の発生可能性について「検討」された形跡もないし、また「予防計画」も策定されなかった。このように、ガイドラインの規定そのものが遵守されていない。そのため、ダム貯水池周辺の移住地では、今後、マラリアの大量発生が懸念される場所である。

第三に、スマトラ象については「移転計画」が策定されたことは確かである。しかし、この「移転計画」は、当初計画通りには実施されなかった。当初、インドネシア森林省としては、40頭の象の捕獲を勧告した。しかし、実際には36頭（1頭は、捕獲時に死亡）しか捕獲されなかった。その理由は、インドネシア国営電力公社による捕獲予算が十分でなかったために、残りの象の捕獲が断念されたのである。

こうしたことから、これらの残存の象は、その他の群れと一緒に、現在18～24頭の群れを形成している。これらの象は、生息環境を奪われてしまったために、移住民の田畑を荒らし回っている。住民の話では、威嚇のために、

やむをえず1頭を射殺したとのことである。

このことは、「移転計画」が、いかにお座なりのもので、またずさんなものであったのかを例証している。また、世界自然保護基金（WWF）インドネシアは、捕獲された象の大多数は、すでに死亡してしまっていると見ている。その理由は、一つには、捕獲の際の麻酔銃の傷痕ないしは移動中の鎖による傷痕が化膿して、それが原因で感染症に罹ってしまったためである。もう一つには、捕獲された象は、当初移転が予定されたギアム・シアック・クチル動物保護区ではなく、訓練センターに移転されたために、そこでは十分な餌が与えられず、餓死してしまっていると見られているためである。

第四に、OECE環境ガイドラインでは「主要及び貴重な魚類、動物、植物への影響」が検討され、また「貴重種の保全計画」が策定される必要があると定められているのであるが、このような措置は講じられなかった。そのため、熱帯動植物の宝庫が、無為のままに消失させられてしまった。

また、スマトラ象を除いては、「動物救出作戦」さえも講じられなかった。貯水により、スマトラ虎、バク、マレー熊、猿などの動物は、一時は島状に残された土地に避難した。しかし、そこでは餌が得られないために、ほとんどが餓死してしまった。

第五に、OECE環境ガイドラインでは「植生保全計画」と「緑化計画」が策定される必要があるとしているのであるが、コトパンジャン・ダムの場合には、このような計画は策定されていない。それどころか、集水域では、大がかりな森林伐採が続けられており、またダム貯水池周辺では、移住地とゴム園の造成のために広範囲にわたって植生が剥ぎ取られてきている。そのため、貯水池への土砂の流入が加速されている。このままでは、ダム貯水池の寿命は、短期のものとならざるを得ないであろう。

第六に、ダム貯水池における堆砂問題が深刻化する一方で、ダム下流域では河川生態系の破壊という問題が発生している。奇妙なことに、OECE環境ガイドラインでは、ダム下流域への環境影響については、それへの配慮事項として掲げられているのは、「下流流量の減少」のみである。このような観点から、OECE環境ガイドラインでは、「他の下流水利用への影響」と題して、以下のように定めている。

「ダム及び発電所の運用計画が、下流の灌漑、上水、漁業等の水利用に支障を及ぼすことがないよう所要の維持流量を放流する計画である必要がある。」

ここでは、単に利水という観点からの「維持流量の放流」という考え方が掲

げられているにすぎない。しかし、河川生態学的な観点からは、一定の維持流量を単に放流するだけでは不十分であるばかりでなく、かえって生態系環境の破壊となってしまう。なぜなら、寒帯・温帯では、雪解けに合わせて、すべての生物の活動が始まり、また熱帯では、雨季と乾季に応じて、生物の営みには違いが生じるのであって、そうした自然界のメカニズムに応じた形での放流が考えられなければならないからである。こうした観点から、アメリカのグレン・キャニオン・ダムでは、雪解けに合わせた放流実験が実施されてきている。

OECE環境ガイドラインには、このような視点が欠如しているために、コトパンジャン・ダムの場合には、下流域の河川生態系への環境影響については、何らの考慮も払われていない。また、OECE環境ガイドラインで掲げられている下流域での「漁業」に対する影響についても、この問題が考慮に容れられた形跡すらない。

第七に、OECE環境ガイドラインでは、堆砂問題に対する配慮が重視されていないばかりでなく、それが、ダム下流域に対して及ぼす環境影響、特に土壌の肥沃度の低下の問題については、ダム建設にあたっての配慮事項とされていない。そのため、コトパンジャン・ダムへの融資にあたっては、この問題は、考慮の対象とはされなかった。ダム下流域では、有機栄養分を含んだ水が流れてこないために、土地の肥沃度は、年々低下していくことは避けられないのであるが、このような問題は、全くに無視されてしまっているのである。

第八に、社会環境への配慮という点でも、コトパンジャン・ダムの場合には、OECE環境ガイドラインそのものが、単なる飾り物にすぎないことを浮き彫りにしている。この点については、OECE環境ガイドラインでは、「施設の設定による歴史的・文化的遺産への影響」と題して、次のように定められている。

「重要な歴史的・文化的遺産に損傷を与えるような場所を事業予定地としないよう配慮される必要がある。かかる場所を事業予定地とせざるを得ない場合、工事工程、予算の変更を含めた保全措置が講じられる必要がある。」

水没させられた村々には、ミナンカバウ系社会の歴史的・文化的遺跡が数多く遺されていた。歴史的に由緒のあるモスクのほかにも、宗教的偉人の名を冠した共同墓地も存していた。また、ムアラ・タクス仏教寺院の周辺には未だに発掘されていない数多くの歴史的・文化的遺跡が眠っていた。こうした状況に照らしてみるならば、このような場所を「事業予定地としない」というのが、環境ガイドラインから導き出される論理必然の帰結であるべきはずであった。し

かし、OECDは、このような結論を下すことなく、寺院周辺に堤防を建設するという「保全措置」を講ずるとの理由をつけて、融資に踏み切ってしまった。

ところが、奇妙なことに、現在、この堤防は、どこにも見当たらない。貴重な歴史的・文化的遺跡を発掘調査も行わないままに水没させてしまったばかりではなく、寺院の「保全措置」として講じたとされる堤防の構築も、実は嘘であったのである。

以上の点を眺めただけでも、OECD環境ガイドラインが内容的にはお粗末極まりない上に、そのようなガイドラインでさえも遵守されてきていないことを知ることができる。コトパンジャン・ダム建設プロジェクトの場合には、OECD環境ガイドラインの不遵守が歴然としているにもかかわらず、融資が実施され、また貯水が行われてしまったのである。その間に、ガイドライン違反行為の矯正措置は、何ら講じられなかったのである。

3 財政上の問題性に対する弾劾

- (1) 日本国のODAにあつては、「援助」案件の内容決定・実施の過程等において、主権者であり納税者である国民の参加の機会は、ほとんど全く保障されていない。また、ODAの対象である被援助国にあつても、最も大きな影響を受ける援助実施地域の住民の参加は、ほとんど考慮されてこなかった。むしろ強権的に抑え付けられてきた。日本国の「援助」の受け入れ国であるインドネシア共和国（1999年には支出純額ベースで16億583万ドルであり、日本の二国間ODA供与総額の1位を占めている）では、スハルト政権の下においては、とりわけ住民の意向は顧慮されることはなく、日本国もこの事情を知りながら「援助」を続けてきた。
- (2) これら日本国の「援助」は一般民衆の声を反映したものではなく、時には、独裁・腐敗政権の延命を支援する役割を果たしてきている。そして、これらの独裁・腐敗政権は、援助国の開発実施主体である政府・援助実施者・時には有力政治家などの利益を満たすためにすら援助を利用してきた。そのために、被援助国においては、上記にとどまらず、被援助国住民のあいだに悲劇的な状況すら発生している。
- (3) 他方、今日、インドネシア共和国等に象徴されるように、こうした日本国などの援助国、さらには世界銀行・アジア開発銀行などの国際金融機関からの「援助」を受けてきた国々は、軒並み深刻な債務累積に直面している。これらの国々の債務返済能力は十分なものではなく、今度とも返済できる見通しはないといわれている。
- (4) 他方において、援助国たる日本国においては、JBICのODA貸付残高は

膨大な額に達し、回収不能までに高まっている。J B I CのODA貸付残高は、すでに11兆円を超えており、これら全てが返済不能というわけではないが、そのかなりの額は「不良債権化」しつつあるとされている。

- (5) このため、現在、この膨大な国際的公的不良債権をどのように取り扱うかについて、援助国側・被援助国双方において深刻な矛盾が生じている。

すなわち、一方において、被援助国側では、この膨大な債務を抱えたままでは経済を立て直すことは不可能である。他方において、援助国たる日本国側では、かかる債務をキャンセルすれば、財政投融资資金からの借入に対する返済ができず、郵便貯金の原資や国民年金などが支払えなくなってしまうおそれがあるからである。

- (6) 今日、開発途上国の人々のあいだでは「独裁政権ないしは腐敗政権が納税者の声を圧殺しつつ強行した『開発』政策の過程で背負った対外債務は、これを返済する必要がない。」との主張が強まっている。

本件に典型的なように、インドネシア共和国のスハルト大統領などの独裁・腐敗政権は、公益を標榜する「経済開発」を装いつつ、私益を満たすために援助資金を利用したのは広く知られるところである。たとえば、アメリカのノースウェスタン大学のジェフリー・ウィンターズ助教授は、世界銀行の内部調査文書をもとに、スハルト時代に世界銀行貸付額の3分の1にあたる100億ドルが「犯罪的債務」（公的融資が官僚や権力者の財界クローニーによって盗まれるか、あるいは有力者の犯罪的行為によって甚大な被害を受けた経済を救済するために債務が生じ、当該社会が不当にも負わざるを得なくなった返済負担）に関係しているとの推定を発表している。

インドネシア共和国内部にあっても、民主化の過程において、NGO・労働者・農民・漁民・先住民族などの広範な連合体「反債務連盟（KAU）」が結成されるなど（2000年）、これらに対する批判が広汎に進められようとしてきている。こうした政権が、社会的にも環境的にも「破壊的な開発」を実施することにより累積させた膨大な対外的債務について、その相談にもあずからなかったどころか、その声を強権的に封じられてきた納税者や住民が、増税や経済圧迫によってこれを背負わされるというのは、全く理不尽なことであって、債務キャンセルの声が高まってくることは当然の事理である（ODAの被害者である本件の原告自身、キャンセルの要求を強くなしている）。

- (7) 日本国は、現在、このような主張が外交問題として表面化しないようにするために、国際通貨基金や世界銀行と手を携え、債務返済に苦しむ被援助国政府に対して、さらにODAを供与し、あるいは債務繰り延べ措置をとることによ

って、当座の困難を乗り切ろうとしている。しかし、当然にも、このようなODAの追加供与がこれらの国々の債務累積をさらに加速させ、矛盾をさらに深刻化させている。

(8) このように日本国は、矛盾の顕在化をおそれて、これを表面上糊塗することによって、さらに矛盾を深刻化させてしまっているのであるが、例えばパキスタンのムシャラフ政権のように、債務キャンセルの意思表示をなしたと伝えられている被援助国も出てきている。報じられるところによれば、2001年10月17日、ムシャラフ大統領は、小泉首相に対して、約50億ドルの債務帳消しを要請したとのことである。ムシャラフ政権は、日本国のテロ防止国際支援の表明に便乗して、過去の債務を帳消しにするよう求めたのである。これに応ずれば、その他の国々が、これに追随して、債務キャンセルを要求するようになるのは必至であり、これまで隠蔽されてきた矛盾は、一挙に具現化するであろう。

(9) しかし、軍事独裁政権の債務がキャンセルされたところで、軍事政権の体質が変わることは期待できないばかりか、さらなる軍事化に予算が使われる可能性がある。それ故、独裁・腐敗政権の債務がキャンセルされても、その国の国民の負担が消えるわけではない。

だが一方においては、民衆の利益を実現しようとする民主政権が、前政権から承継させられた累積債務を、どのように取り扱うかということは、真剣に顧慮されなければならない。その様な政権が登場してくる場合、それまでの独裁・腐敗政権が特定の利権集団と結びついて作り出したところの、民衆の利益とは無縁の不当・不正な債務については、その支払を拒否するという主張が持ち出されてくる可能性が高い。その際に、そのような要求に対して、どのように対応するかが問われているのである。

(10) 長期的に見れば、こうした民衆の声を重視する政権が登場すれば、債務キャンセルないし一部キャンセルが、外交ルートの俎上にのぼってくる可能性は十分にあり得る。

しかし、その際にも日本国は、なお、独裁・腐敗政権へのODA供与を正当化し、また援助が特定集団の私的利益実現に傾くことをさほど深刻に考えないできたJICAやJBICの「援助」活動を弁護し続けるのであろうか。

インドネシア共和国政府にあっては、現在、一般国民はスハルト政権が作り出した膨大な債務負担に喘いでいる。すでにこれらの人々の間では「スハルト政権が、ファミリー・ビジネスや特定の利益集団の利益のために借り入れた債務については、そんなものが支払う必要はない」との声が、広汎に上がって

きている。日本国・外務省等は、ODAに関連して生じる問題は、相手国内部の問題として、敢えて知って知らぬ顔をしながら、貸金を増やし続けてきたのであるが、今後そのように言って済ませることは許されない状況が、現実のものとなってくるのである（なお、日本国が問題性の存在を自覚しながらも、相手国政府と癒着しつつ「援助」を増やし続けたことには、後述するとおり、「援助」の構造自体が、日本側の関係企業などの権益と不可分に結びついているという、基本的問題性が根本理由として存在している。まさにここにこそ

「援助しながら怨まれる」

というODA本来の趣旨とはほど遠い、日本のODAの現実の根拠が存しているのである。

4 小括

- (1) コトパンジャン・ダムは、東電設計がプロジェクト・ファイナディングにより援助案件策定を行い、JICAがフィージビリティ・スタディを行い（実際は、東電設計が受注した）、JBICが総額で311億7700万円の借款契約を締結したプロジェクトである。

コトパンジャン・ダム建設は、まさにスハルト政権下で象徴的な「上から」の上意下達的

プロジェクトそのものであり、住民の意向は全く顧慮されなかった。それどころか強権的に抑圧され、プロジェクトは推進された。このプロジェクトでは、2万3000人もの人々が、先祖伝来の土地を追われ、「開発難民」ともいうべき状況に追いやられた。また、スマトラ象・スマトラ虎をはじめとした世界的に希少な野生生物が絶滅の危機に瀕している。

- (2) このため現地では、今日、これら「開発」によって生活を破壊され生存の危機に直面させられている人々を中心に、コトパンジャン・ダム撤去要求の声が高まってきている。本件訴訟は、自然環境破壊・生活環境破壊などの悲惨な損害をもたらしたコトパンジャン・ダムの原状回復すなわちコトパンジャン・ダム撤去の問題であり、第一義的には、このコトパンジャン・ダムによって生じた損害の回復のためのWALHIの活動実費の支払を求めるものである。

そして、同時に、本訴訟は、インドネシア共和国の人々にとっては、スハルト政権下における不明瞭で一方向的な援助のあり方を問う象徴的なケースであり、インドネシア国民の声に耳を傾けることなく借り入れられた円借款のキャンセル問題であるともいえる。

さらに、日本国民にとっては、本訴訟は、日本のODAのあり方を根源

的

に問う、その端緒としての意義を有しているものである（なお、内外の批判何よりも現地の声に耳を傾けることなく、コトパンジャン・ダム建設計画を強行した、当時の外務省の当局者をはじめとする関係者は、その責任を厳しく追及されなければならない）。

第3 本訴訟の前提問題～ODAについて

1 ODA（政府開発援助）

(1) 開発途上国の経済発展を支援することは「経済協力」と呼ばれているが、経済協力のための資金供与のうち、次の3つの条件を満たしている資金供与の類型がODAである。

- i 政府ないし政府の実施機関によって供与されるものであること
- ii 開発途上国の経済開発や福祉の向上に寄与することを主たる目的としていること
- iii 資金供与については、その供与条件が開発途上国にとって重い負担にならないようになっており、返済期間や利率等の融資条件の緩和度を示す指標（グラント・エレメント）が25パーセント以上であること。

日本のODAは1991年以来10年連続世界一の規模となり、毎年約1兆円（2002年度予算9106億円）がODA予算として使われている。

(2) ODAの形態

ODAは、資金の流れから2国間援助と多国間援助（国際機関に対する出資・拠出等）に分けられる。2国間援助は円借款（有償資金協力）と贈与（無償資金協力、技術協力）の二つの形態に分類される。日本の援助の特徴は、ODAに占めるこの円借款の比率の高さ（ODA予算中51.3パーセント／2000年度）にある。

(3) 実施体制

無償資金協力と技術協力は主にJICAが、円借款は現在JBICが実施している。

(4) 円借款

円借款は、JBICが途上国政府およびその政府機関等に貸し付けを行うものである、その融資残高は約11兆円にのぼる（2000年度実績）。借款の財源は、

- i 税金や国債などが財源の一般会計からの出資金
- ii 財政投融资制度からの借入金

iii 自己資金等

から構成されているが、その主な財源は、郵便貯金や国民年金などの資金からなる財政投融资制度からの借入金である。

円借款は、プロジェクト・タイプとノン・プロジェクト・タイプ（商品借款、構造調整借款等）に分類されるが、前者の内、プロジェクトに必要な設備、機材、土木工事、コンサルティング・サービスなどに必要な資金を融資する「プロジェクト借款」が円借款の主要な形態である。前者にはまた、プロジェクト形成のための「エンジニアリング・サービス借款」も含まれる。

(5) 円借款プロジェクトの実施過程

円借款の実施（プロジェクト・サイクル）は大きく、次の6つのプロセスからなる。

① プロジェクト準備

途上国政府がプロジェクトを決定するとされているが、実際には、日本側企業（プロジェクト・ファインディング業者、本件では東電設計がこれに該当する）が有望案件を発掘して途上国政府側に提案をし、途上国政府からの要請を受けて、JICAが無償技術協力として「フィージビリティ・スタディ」とよばれる実行可能性調査を行い（実際には、東電設計のような開発コンサルタント会社に委託される）。

② 要請

途上国政府による円借款の正式要請

③ 検討・審査

上記フィージビリティ・スタディがJICAにおいて審査され、その後、4省庁（旧外務・旧大蔵・旧通産・旧経企庁）とJBICにおいて検討される。そのうち、これら5者合同による「政府勉強会」が開催され、政府ミッションおよびJBIC審査ミッションが現地に派遣される。

④ 借款の決定

上記各ミッションの報告を「政府勉強会」で検討し、当時は、外務・大蔵・通産・経企庁らの4省庁協議により、借款供与が決定（政府は、JBICの審査結果を受けて、供与額・条件を決定する）される。

そして、日本国と途上国政府が「交換公文」を締結し、これを受けてJBICと借入国の間で借款契約が締結される

⑤ プロジェクトの実施

借入国政府が資機材・土木工事・エンジニアリング・サービスなどの競争入札を実施し、エンジニアリング・サービス業者が決定される。そして、

エンジニアリング・サービス業者がフィージビリティ・スタディの見直しや詳細設計を行い、入札書類を作成し、これを経て、各業者と現地政府が契約を結ぶ。そして、具体的工事が行われる。

⑥ 完成／事後評価

2 日本国のODAの問題性

(1) 以上が日本国の行ってきているODAの構造である。

しかし、ここには、以下の如き問題性が存在していることが従前から指摘され続けている。にもかかわらず、日本国はこれらを改善しようとしないうちに現在に至っている。

その結果、本件の如き大きな問題が不可避的に生じてしまっているのである（なお、数々の問題点を指摘されているODA案件は本件にとどまらない）。

(2) 問題点

① 「ODA基本法」が存在していない

ODA関連予算は、毎年度1兆円を超えるほどの巨額の財政費用である。本来であれば、恒常的にこのような巨額の支出を伴う政策については、その主体・決定手続・運用手続・成果検証などについて詳細に定めたところの基本法規が必須である。

しかるに、日本国は、各界からの指摘・要求にも関わらず、これの立法を行わないままに現在に至っている。

② 国会の不関与

「ODA基本法」の不存在は、まず国会の不関与という大きな問題性として顕れている。

すなわち、ODAは、本件にも明らかな如く、巨額の財政支出を伴い、かつ相手国の経済・社会等にも大きな影響を必然的に与える。このように重大な政策の決定については、当然に「国権の最高機関」たる国会が関与し、ここでの十分な議論を経てなされるべきである。

しかるに、現状では、ODAの予算総額について国会で議論されるけれども、その用途については国会で議論されるようなことは殆どなく、政府がこれを決定し、運用しているのが実態であり、国会に対する報告義務すらない。

結局、これほどの大きな政策でありながら、国会は、一貫してノータッチであり、これをしかるべくコントロールするための正当な権限を与えられていないのである（本件では、あまりに問題性が大きかったため、1990年以降例外的に国会で一定の議論がなされた。しかし、政府は、資料も不十分にしか出さず、また具体的詳細にわたった議論もなされていなかった。法律

が政府に対してこれらを義務づけていないためである)。

③ 情報の不開示

上記のとおり、「ODA基本法」に羈束される構造になっていない日本国において、ODAについては、その決定・運用などについて、国会での議論を法的に義務づけられていないため、甚だしい秘密主義をとっている。そのため、個々のODAにおいては具体的に何が行われようとしているのかについては、関係者以外、国民の誰にもなかなか解らない。

そのため、政府・関係企業等が作成した書面などに基づいた厳密な政策論議・学問的論議がなかなか成立せず、政策的批判が著しく困難であるのが実情である。

これは、直ちに政策の客観的正確性・公正性・有効性等の担保の不存在という致命的な欠陥として顕れざるを得ないのである(今次のいわゆる「ムネオ問題」も広義におけるODAに関連する問題である)。

④ 責任主体の曖昧性

「ODA基本法」の不存在は、また、政策決定・運用についての責任主体の曖昧性という問題をも惹起している。

すなわち、前記のとおり、各個別のODAについては、関係省庁間の「勉強会」なる論議により検討が進められ、これを閣議が承認して決定される。

結局、政府部内で個々のODAについて総合的かつ具体的に責任を担う主体がどこなのか、誰なのかが曖昧なまま、その時々状況によって、便宜主義的に決定されてきているのが実情なのである。

⑤ 公正・客観的な評価システムの不存在

ODAは、巨額の資金が投入され、対象国・地域・国民の経済・社会に対して大きな影響を及ぼす重大な政策である。

したがって、各個別のODAについては、それが果たしてODAの基本的趣旨・理念に沿ったものとして所期の目的を達成できたのかという評価作業が豊富かつ正確な資料に基づき、そして何よりも公正・客観的な立場から厳密になされなければならない。これによって初めて、ODA政策の正しい展開・運用が可能になるのである。

しかるに、「ODA基本法」の不存在・国会の不関与システムは、その厳密な検証システムを全く欠いているのである。

日本国の外務省は「日本のODAは90パーセントは成果を挙げている」と述べているが、それは独りよがりな自画自賛でしかない。

むしろ、本件がその典型であるが、大規模な自然破壊・環境破壊・生活破

壊・文化破壊等を結果する日本のODAは多数の被害者（それは「開発難民」とさえ呼ばれている）からは怒りと怨嗟の対象以外のなにものでもないものであり、このような愚行が世界各地で反復されてきているのである。

まさに「援助」をしていながら、当の相手国の住民からは感謝されないどころか、逆に恨まれ嫌われるという事態が繰り返されているのである。

⑥ 「誰のための援助なのか」についての本末転倒

上記の他にも次の問題がある。

それは、ODAの実際の意図・目的が、援助される相手国の経済的自立発展・民生の向上安定という本来の目的そのものとは、必ずしも一致しない実態が存在する。それは、例えば、次のような形で存在する。

i グラント・エレメントの低さ

諸先進国の行っているODAにおいて、日本のそれはグラント・エレメントの相対的低さにおいて際立っている。

すなわち、贈与が少なく、円借款が多いのである。年額でこそ日本国のODAは大きい、結局のところ、それは貸付であり、回収されるべきものとされているのである。

その結果、相手国は、多額の元利の支払に苦しんでいるのが実情である。このような重圧が相手国の経済の発展に寄与しないことは当然である。

ii 相手国の支払不能

こうした重圧はもともと援助を必要とした相手国の財政破綻として結果するであろうことは当然である。

実は、本件における援助の相手国であるインドネシア共和国は、日本のODA累積援助額でトップであり、その総額はすでに4兆円にも達している。そして、その内、円借款は3兆5000億円であり、今やインドネシア共和国にはその債務の支払い能力は無いといわれている。

日本国は、さらに新たな借款を起こして、事実上これを繰り返すというやり方で、まさに矛盾が激発しようとしている事態を糊塗してきているのであるが、このような方策で矛盾が解決されるということはありません、いずれ、抜本的債務免除問題として正面的に表面化するであろうことは必至であり、日本経済はこれに直撃されることにもなるのである。

iii 日本企業とのタイド・システム（いわゆる「ひも付き援助」）

ODA事業は巨大な開発プロジェクトがほとんどであり、その工事等を担う企業の得る利得は莫大である。しかるに、日本国のODAには、事業の工事などについて、1980年代までは、日本の企業への発注を義務づ

けているものが多かった（特に、無償援助に関しては、現在でもそうである）。こうした円借款をタイド・ローン（ひも付き援助）という。結局は、日本国の貸し付けた資金は日本国に還流するシステムになっているのである。それでは「日本国のための援助」ということになるであろう。

もっとも、この点での強い批判を受けてきた日本国においては、近年、発注先を限定しないいわゆるアンタイト方式が増してきているとされている。しかしながら、現地企業といっても日本企業の現地子会社であったり、合併会社であったりする例が多いとされている（ちなみに、本件においては、ダム本体部工事を、日本企業のハザマの他に、現地企業の1社が受注した）。

ちなみに2000年度における10億円以上の契約についてみると、日本企業の応札率は63パーセント、落札率は60.3パーセントとなっており、日本企業が入札した援助案件のほとんどが日本企業によって受注されている。

なお、この関係で無視できないのが、日本のコンサルタント会社などが行ういわゆる「プロジェクト・ファイナディング」と呼ばれる「案件探し」である。ODAの趣旨からするならば、ある国内において、地域住民からのニーズが存在し、それに基づく事業政策の決定がなされ、その実施のための資金の供与などを日本国などの援助国に「要請」するのが筋であろう。しかし、日本国の行うODAにあっては、実情は全く異なる。たしかに「要請主義」が謳われてはいるが、しかしながら、実際は相手国の「要請」の前に、日本国側による「プロジェクト・ファイナディング」つまり「案件探し」が先行するのである（“案件探し”・・・これほど事の本質を語っている言葉は他にないであろう）。すなわち、個々のODAは、たいの場合、まずもって日本側企業（コンサルタント会社など）が「何処かODAプロジェクトの対象にできるところはないか」と探し回り、それを見付けると、当該国の政府に推奨し（その際には大使館なども一体となって動くとされている）、援助「要請」を実現し、以降、日本政府への働きかけ・工作などに入り、国会での議論もなく、一般国民の知らぬ間にODAとして動き出す、という構造なのである。相手国の要請に先立って、日本側で案件を探す、見つけた案件を当該国の政府に推奨する、その結果、当該国の「要請」が出されてくる。この構造において、ODAが相手国ないしその国民の真の利益よりは日本国企業の利益追求に傾きやすいという状況が存していることが明らかである。

iv 現地政権との癒着

日本国の政策態度は、一旦、援助を開始してしまうと、後は相手国の責任であるとの態度に終始している。

そのため、例えば開発独裁型政権などがODA資金を恣意的に流用し、私腹を肥やしたり、強権的政権維持を図ることについて間接的にこれを利用する構造になることが多いとされている。

v 現地住民の無視

このように現地政権のみに顔を向けた姿勢は、当然にも民生が向上されるべき当該現地住民を無視して、ことが進行されることになる。

日本国らは、現地住民の希望・要求に耳を傾け、そこから真に必要なとされているものの実現を図ろうとする（いわゆるボトムアップ方式）のではなく、とにかく資金導入のみを図ろうとしている政権とのみ結託し、双方の利害の一致点において政策が決定されてゆくことになる。このため、政権の思惑のみが先行し、現地住民にとっては、要求の実現どころか、有害無益でしかない破壊的事業が降りかかることになり（いわゆるトップダウン）これに対する現地住民の抵抗に対しては権力が行使され、強行されるという形になってしまうのである。

この様な実情について、日本国は、相当程度、認識を有しているはずなのであるが、相手方政府からの虚偽的報告に対して敢えて異を唱えることなく、そのまま受容し、「成果」として喧伝している事情がある。

vi 以上よりするならば「誰のための援助なのか」というとき、ODA本来の趣旨・目的からは逸脱し、本来的な究極の受益者であるべきはずの相手国現地の住民のためでは全くなく、日本国のODA関連企業および現地の開発独裁型ないし開発至上主義的政権担当者の利益のためにODAの供与が行われていると言わざるを得ないのである。

第4 コトパンジャン・ダム建設を巡る事実の経過

本章においては、簡単に事実経過のみを記し、問題点については、後に触れることとする。

1979年

9月～11月 東電設計、プロジェクト・ファイナディング(援助案件探し)を実施する

1980年

8月 東電設計(株)、プレ・フィージビリティ(予備実行可能性)

	調査を実施する
1981年	10月 東電設計、プレ・フィージビリティ報告書を作成する
1982年	9月21日～ JICA、事前調査団を現地に派遣する
1983年～	1月 東電設計、JICAの委託により、フィージビリティ・スタディを実施する
1984年	アンダラス大学、環境影響評価（EAI）を実施する マルトノ移住大臣、住民中核農園プログラムの実施を発表
1985年	2月15日 OECF、エンジニアリング・サービスのために、11億5200万円の円借款を供与する貸付契約を締結する
1987年	2月～ 東電設計、詳細設計を作成する
1988年	リアウ大学、環境管理設計調査の実施と環境維持計画の作成する
1989年	リアウ大学、コト・ラナ移住地についてのフィージビリティ・スタディを実施する
	3月 鉱業・エネルギー省EAI委員会、環境影響評価書と環境維持計画を承認する
	10月 「環境配慮のためのOECFガイドライン」が策定される
1990年	4月 日本経済新聞がコトパンジャン・ダム建設計画による環境破壊の危険性を報道
のある旨を表	6月 日本政府、対インドネシア援助国会議（IGGI）において、コトパンジャン・ダム建設事業資金を供与する意向を表明する
	9月 日本政府、OECF再調査団を現地に派遣する
	12月13日 日本政府、インドネシア政府と交換公文を締結し、建設事業費の第1期分として125億円の円借款の供与を約束する。この際、日本政府、インドネシア政府に対して3条件の遵守を要求する

12月14日	OECD、インドネシア側と借款契約を締結
1990年～1991年	リアウ大学、南ムアラ・タクスと南シベルアンにおいて、移住地のためのフィージビリティ・スタディを実施する。アンダラス大学、西スマトラ州のリンボ・タタ移住地についてのフィージビリティ・スタディを実施する。リアウ州自然保全事務所と森林省自然保全局、野生生物管理に関する調査を実施する。
1991年	
2月	インドネシア政府、移転同意書の署名集めを開始する
4月	インドネシア政府、財産目録の作成を完了する
4月10日	海部首相、援助4原則を表明する
6月12日	日本政府、対インドネシア援助国会議(IGGI)において、建設事業費の第2期分として175億2500万円の追加融資を行う旨の意図を表明する
1992年	
10月	コトパンジャン・ダム建設工事が着工される
1996年	
3月	コトパンジャン・ダム建設工事完了
1997年	
2月28日	貯水開始
2002年	
1月24日	JBICにより事後評価ミッションが現地に派遣される

第5 コトパンジャン・ダム建設計画に対する現地住民の対応等

1 経過

コトパンジャン・ダム建設によって、住民には後記のような重大な被害が生じることになり、その結果、必然的に住民などからコトパンジャン・ダム建設に対する反対運動が展開されることとなった。住民による反対運動等の経緯は、次のとおりである。

1983年

12月19日 ティガブラス・コト・カンパル郡の住民、バトゥ・ブルスラット村にて17項目の要求事項を網羅した声明書を発表する

- 1987年 国際NGOフォーラム、集団移住計画への世界銀行融資
の中止を求める決議を採択する
- 1990年
4月 リアウ州において、住民同意取り付けのための買収工作
が始まる
インドネシア現地紙において日本政府がコトパンジャン
あたって「3条件」を付していたことが報
道される 8月～9月 日本の民間調査団、現地調査を実施し、日
本政府に対し てコトパンジャン・ダム建設プロジェクト
への融資を中止するよう要 求する
- 1991年
5月7日 1991年5月、インドネシア政府は、日本が融資供与
の条件としてあげていた3条件を全て満たしたとする最
終報告を提出した。
しかし、1991年5月7日、インドネシア森林保全ネ
ットワーク（SKEPHI）のヒラ・ジャムタニ事務局
長は、訪日し、SKEPHI、「地球の友」、「熱帯林行
動ネットワーク」（JATAN）の連名で、日本政府、
OECDに対し、次のような申し入れをおこなった。①
環境アセスメントが公表されるべきこと、②独立調査ミ
ッションが現地に派遣されるべきこと、③野生生物保護
のためのプランが策定されるべきこと、④このプロジェ
クトに関する一切の情報が公開されるべきこと。
- 6月19日 ウィーンで開かれた「大規模ダムに反対する国際連合」
会議において、日本政府に対して「インドネシアのコト
・パンジャン・ダムへのOECD融資を中止すること」
を勧告する決議を採択する。
- 7月8日 鷺見一夫新潟大学教授らは日本のOECDを訪れ、スマ
トラゾウの移転については議論的になっているが、スマ
トラトラなどその他の野生生物についてはどのような
調査が行われているか質問した。これに対し、業務第1
部業務2課の大竹智治氏は、「トラがいなくなるからと
いって、どういう問題があるのですか」と居直った。
さらに、同教授が、ムアラタクス仏教遺跡の保存問題に

ついて触れ、寺院周辺に堤防を築くことが構想されているようであるが、フィジビリティ・スタディでさえも、考古学的に価値のある地域は寺院周辺のおよそ14平方キロメートルに及ぶとしているのであって、このような遺跡について十分な発掘調査も行わないで水没させてもよいのかと尋ねた。これに対し大竹氏はフィジビリティ・スタディに記載されている内容が果たして正しいのかどうか疑わしいと答えた。

7月19日

住民代表、インドネシア森林保全ネットワーク・全国民主主義同盟・タラタク協会の代表とともにOECFジャカルタ事務所を訪れ「移転同意書は脅されて採られたので無効」と主張し、影山俊郎所長と話し合った。この際、住民代表は、移転同意書と補償同意書の無効を宣言したコト・トゥオ村住民の声明書と182名の署名簿を提出し、また、SKEPHIのヒラ事務局長も住民の権利擁護と共に熱帯雨林の破壊をくい止める立場から同席し、同意書の無効を訴えた。

このころ、インドネシア環境フォーラムの元代表アグース・プルノモは、共同通信ジャカルタ支局長浅野健一氏のインタビューに対し、コトパンジャン・ダムに関する日本政府の3条件について「まだ、修辭的な段階に留まっている。実際どう実現するかだ。宣言はしても被援助国が主権の侵害だと抗議すると引っ込んでしまう。論議しようとしな。『われわれはすでに注文をつけた。インドネシア政府はきちんとする約束した。これが実行されると確信する』といつものようにいうだけなら、前と同じだ。コトパンジャンの三条件をどう実現するかメカニズムがない。日本外務省の外交官、OECFのスタッフと住民との日常的な接触の場がない。いま支援者がダム予定地に入れない状況が生まれている。インドネシア市民として日本のこの条件は主権侵害にならないし、侮辱もしていないと思う。インドネシア憲法はすべての市民の権利を保障している。憲法は政府の任務は人民がプロジェクトから最大利益を受けることを求める。条件

内容は普通のことで、本来われわれ自身が実現すべきことだ。クドウンオンボのような悲劇は起きてはならない。」と主張している。なお、クドウンオンボの悲劇とは、後述のとおり、世界銀行、日本輸出入銀行などの融資で1989年1月に完成したクドウンオンボダム建設に伴う問題である。約6000ヘクタールの土地が水底に沈み、37村の住民5400世帯、2万3400人が立ち退きをせまられた。このうち1500世帯7000人が移転に反対し、現地に残留していたが、政府は水門を閉め、貯水を強行した。工事はニチメンが落札し、間組が請け負った。住民は「日本の援助が、貧しいわれわれを窮地に追い込んだ」と言った。日本の援助のあり方に疑問を投げかけた事件のひとつである。

- 8月 ティガブラス・コト・カンパル郡の住民、総意声明書を発表する。
- 9月2日 ティガブラス・コト・カンパル郡の住民代表5名がジャカルタにて声明書を発表するとともに下院・政党・政府機関などを訪問する
- 9月3日 日本大使館、住民代表5名とコトパンジャン連帯行動委員会メンバー20名による面会要求を拒絶する
- 9月4日 住民代表5名とコトパンジャン連帯行動委員会メンバー3名が日本大使館を訪問し、住民総意声明書と約700名の署名簿を提出する
- 9月7日 2名の住民代表が来日する
- 9月9日 住民代表、記者会見において「日本政府と日本国民に対するインドネシア・コトパンジャン連帯行動委員会からの声明書」を発表した後、ODA研究会に出席する
- 9月10日 住民代表、愛知和男衆議院議員・小杉隆衆議院議員・矢田部理参議院議員・千葉景子参議院議員を訪問した後、OECDと会談を行う
- 9月11日 住民代表、林義郎衆議院議員を訪問する。
- 9月12日 住民代表、堂本暁子参議院議員と懇談した後、大蔵省国際金融局開発金融課を訪問する
- 9月13日 住民代表、通産省経済協力調整室を訪れた後、外務省経

- 济協力局有償資金協力課と会談し、住民総意声明書と約700名の署名簿を提出し、次いで経済企画庁経済協力第1課を訪問する。
- 船橋市で国際シンポジウム開催する。
- 9月14日 横浜市で国際シンポジウム開催する。
- 9月17日 住民代表、JICAと話し合いを持った後、東電設計を訪問する。
- 9月19日 林義郎衆議院議員と小杉隆衆議院議員の仲介により住民代表と4省庁・OECDとの話し合いが行われる
- 10月3日 ODA研究会、外務省経済協力局有償資金協力課に対して、コトパンジャン・ダム建設プロジェクト関連資料の提出を要求する
- 1998年 旧タンジュン・バリット村の10世帯、移転について
の 補償の支払いを求めて提訴する
- 2000年
- 5月24日 旧タンジュン・パウ村の67世帯、移転についての補償の支払いを求めて提訴する
- 2001年
- 7月19日～ 3名の住民代表が来日する
- 11月 水没10カ村の代表により、「コトパンジャン・ダム被害者住民闘争協議会」が結成される
- 2002年
- 3月 「コトパンジャン・ダム被害者住民闘争協議会」に3カ村(タンジュン村、バルン村、パンカラン村の代表が参加する
- 5月27日～ パダンにおいて、「コトパンジャン・ダム被害者住民闘争協議会」のコンGRES(住民代表大会)開催される

2 被告らの対応等

コトパンジャン・ダム建設に対しては、現地住民などにより、概要以上のような反対運動が展開され原告の構成団体であるタラタック協会はこのサポートを行ってきたが、それに対する被告ら及びインドネシア共和国政府の対応は、一片の誠実さのかけらも見られず、まさに「弾圧」そのものであった。

(1) 捏造された移転・補償同意書

- ① 後記のとおり、日本国が本件ODA供与に対して前提条件として3条件を付しており、その中では、現地住民の移転については「事業により影響を受ける世帯の移転合意は公正かつ平等な手続きを経て取り付けられなければならない。」とされていた。

しかるに、インドネシア共和国政府は、その現地住民の移転についての「同意」が得られたということを取り繕うために、種々の画策を行ったのであった。

- i まず最初に、インドネシア共和国政府は、個々の住民「同意」に代えて、各村落指導者の「同意」で、これらの条件が満たされたという形を採ろうとした。そのためにインドネシア共和国政府は、1991年4月13～14日に、密かに一部の村落指導者をバンキナンに集めた。そして、この会合において、参加した村落指導者には、一人当たり15万ルピアの署名報酬が配られたのである。こうして、移転・補償同意書への署名がインドネシア共和国政府によって買収された。
- ii そして、この署名の買収のために、インドネシア国営電力公社は、村落指導者のジャカルタへの招待旅行を設定した。バンキナン会合の直後に、インドネシア国営電力公社の現地責任者のシャフリル・アミルは、150名の村落指導者を、西ジャワ州のチラタ・ダムとサグリン・ダムでの貯水池漁業の見学旅行に招く旨を発表した。この見学旅行の目的については「コタ50県とカンパル県の社会が経験することになる状況は、チラタ・ダムとサグリン・ダムの貯水池の周辺の社会が遭遇した経験と似ているからである」と説明された。

しかし、これは、表向きの理由で、実際には村落指導者を懐柔することにほかならず、そのため、チラタ・ダムとサグリン・ダムの貯水池漁業の見学は形だけのもので、実際にはアンチョルのレジャーランドやタマン・ミニ公園への観光旅行が主目的であった。そして、この際、参加者には一人当たり20万ルピアの小遣いが支給された。

- ② コトパンジャン・ダム建設計画中止を求める住民要求

- i 一部村落指導者の「同意」だけで（しかも買収された「同意」であった）、住民の「同意」が得られたという形が採られたことを現地住民が知った時、これに対する抗議の声を上げようとした。

しかし、現地では、インドネシア共和国政府は、軍隊を常駐させて、厳しい監視体制を敷き、一切の集会を禁止してしまった。

- ii それにもかかわらず、コトパンジャン・ダム水没対象の村々では、軍・治

安当局の監視の目を盗んで密かに現地住民によるコトパンジャン・ダム計画反対の住民声明書が採択され、およそ700名の人々の署名が集められた。そして、10ヵ村の住民たちからの委託を受けて、5人の代表が、声明書と名簿を携えて、1991年9月1日にジャカルタに向かった。5名の住民代表は、ジャカルタにおいて、翌9月2日、国会・政党・関係政府機関などを訪れて、住民声明書と700名の署名簿を提出した。同時に、住民代表は、ジャカルタ訪問の目的を記載した声明書を発表し、これを関係機関および報道機関に配布した。この住民声明書においては、コトパンジャン・ダム建設計画が、次のような異常な事態の下で進められてきたことを指摘していた。

ア このコトパンジャン・ダム建設計画の立案段階から今日に至るまで、政府側による住民への説明は一度もなされておらず、公開の場での民主的な話し合いは何ら行われていない。

イ 補償同意書は、住民の知らないうちに、また住民全体の承認を得ないままに、住民代表を唱える一部の人々により署名されたにすぎない。

ウ 再定住地は、住民との協議が行われることなく、インドネシア共和国政府により一方的に建設されている。

そして、このような異常事態を指摘した上で、住民代表声明書では、以下のような要求を掲げていた。

エ すでに署名されている補償同意書は、無効のものとして取り扱われるべきこと。

オ コトパンジャン・ダム建設計画に関する討議を白紙に戻して、最初からやり直すべきこと。

カ コトパンジャン・ダム建設計画に関する一切の情報が、住民に対して公開されるべきこと。

キ コトパンジャン・ダム建設計画についての討議は、インドネシア共和国政府による干渉を受けることなく、公開の場で民主的な方法で、行われるべきこと。

iii また、同日、現地住民代表は「コトパンジャン連帯委員会」の5名の学生とともに、内務省を訪れ、ルディニ内務大臣との面会を要求した。しかし、内務省は、大臣がジャカルタにいないことを理由に、面会要求には応じられないとした。その代わりに、治安関係者が応接すると答えた。住民代表は、このような形での面接には応じられないとして、内務省側の提案を拒否した。

iv さらに、住民代表は、9月3日、日本大使館にも面会を求めた。この面会要求には、約20名の「コトパンジャン連帯委員会」メンバーが同行した。

しかし、大使館側では回答に手間どり、このため門を挟んで、現地住民代表と大使館員との間で、入館させろ、させないで押し問答となった。この間、学生たちは、「援助とともに地獄へ行け！」(Go to hell with your aids!)とのシュプレヒコールを繰り返した。そして、門前でのやりとりの過程で、佐野利男一等書記官は、住民代表と1名の学生との会談を提案した。

しかし、学生たちは、代表団全員の入館を要求した。そのため、門前交渉は、難航した。結局のところ、この日は、会談は実現せず、翌4日午前に大使館員が、現地住民代表のほかに3名の「コトパンジャン連帯委員会」メンバーを加えた計8名の代表団と応接することで話し合いがついた。

この4日の話し合いには、佐野一等書記官らが応接したが、この会談は、異常な状態の下で行われた。というのは、会見の場には、2名の制服警官と2名のインテリジェンスと呼ばれる政府諜報部員が同席していたからである。これら警官たちは、話し合いの間中、現地住民代表らの似顔絵を描き続けていた。このような行為が、現地住民代表に大きな精神的圧迫になったことはいうまでもない。そのため、現地住民代表らは、言いたいことも十分に言えず、発言を抑えざるを得なかった。これら制服警官と政府諜報部員は、いずれも日本大使館付きの警備員ではない。明らかに外部から来館した治安担当の警官である。本来、大使館内は治外法権であり、インドネシア官憲と言えども、勝手に立ち入ることはできないはずであり、日本大使館側が警官らを招き入れたのである。

(2) 現地住民代表の来日と日本政府による住民要求の拒絶

- ① 1991年9月7日、現地住民代表1名と女性環境保護活動家であるイエニー・ロサ・ダマヤンティ氏が来日した。滞日中、2人は、4省庁(外務省・大蔵省・通産省・経済企画庁)、OECDなどを訪問し、コトパンジャン・ダム建設計画の中止を訴えた。

そして、9月19日には、自民党対外経済協力特別委員長の林義郎議員と衆議院環境委員長の小杉隆議員の呼び掛けにより、4省庁とOECDが一同に会し、住民代表との話し合いが行われた。この会合において、現地住民代表は、コトパンジャン・ダム建設計画の過程において、現地住民の移転同意が得られていないことを説明し「援助」中止を求めた。これを受けて、林議員と小杉議員は、4省庁とOECDに対して、本件への融資を再考するよう促した。しかし、これに対して、当時の外務省有償資金協力課長である石橋太郎(以下、「石橋」という)は、4省庁を代表すると称して

「われわれの話し相手は、インドネシア政府だけです」

と高圧的に言い放った。要するに、石橋によれば、外務省が相手にするのは、スハルト政権だけで、住民の意向などは、眼中にないというのであった。このような石橋の居直りともいえる発言により、この会合は一挙的に険悪なものとなり、これに反発して、現地住民代表は、

「日本の援助は誰のために行われるのですか？ 援助において、われわれ住民は、一体どのように位置づけられるのですか？」

と問い質したところ、石橋は、これに対して

「われわれとしては、インドネシア政府による住民対策を慎重に見守るだけです」

と述べた。そして、石橋のこの発言に対して現地住民代表は、

「インドネシア政府が住民の意向を無視し続けているからこそ、このような状況の下では融資をやめて欲しいと日本政府にお願いにきています。3条件は、一体何のために付けられたのですか？」

と反論した。しかるに、石橋は、3条件の遵守問題には触れようとはせず、移住対策がインドネシアの国内問題である旨を繰り返した。しかし、この内政不干渉の原則を楯に取った石橋の発言に対して、さらに住民代表は、

「あなた方日本国民の税金の使い方の問題なのです。人権侵害と環境破壊を引き起こすような場合でも、『援助』と強弁なさるのですか？」

と指摘した。

この間、他の省庁とOECDの関係者は、終始、押し黙ったままであり、こうして、国会議員の仲介により開かれた住民代表と政府機関との間の話し合いは、上記のような石橋のまさに強権的ともいえる対応振りのために物別れに終わってしまったのである。

3 小括

以上のとおり、コトパンジャン・ダム建設計画に対しては、インドネシア共和国政府による弾圧にも関わらず、現地住民を初めとした反対の声が澎湃と巻き起こっていた。そして、現地住民は、来日をしてまでも、コトパンジャン・ダム建設計画の中止を訴えていたのであるが、日本国は、それを何ら誠意ある対応も見せず、無視し続けたのである。

第6 コトパンジャン・ダム建設によって生じた被害

本件においては、前記「日本のODAの問題性」において指摘したような問題性が大規模かつ集中的なかたちで露呈した事案である。以下、住民及び自然

生態系の被害状況について論ずる。

1 住民の被害

(1) タンジュン・バリット村

- ① タンジュン・バリット村には、総計で12個の井戸が設けられているのであるが、いずれも赤茶けた水で飲用に適さない。これらの井戸には、「OECF援助資金」で作られた旨が表示されているが、これらの井戸は水道施設としてほとんどが役に立っていない。
- ② そして、政府から代替地として約束されたゴム園が整備されていないため、村民には収入源がない。両村の周辺の山々には火が入れられ、燃え残った木々が黒々と放置されているが、ゴムの成木の姿はなく、僅かに道路脇にゴムの若木が植えつけられている程度である。
- ③ また、不公平な形で補償が行われた結果、家々の造りには、相当に大きな格差がある。政府提供の木造住宅（縦6メートル、横6メートル）と比べて、一部には飛びぬけて豪勢な家屋もあるなど、家々の作りには、相当大きな格差がある。そして、電気代を払える家庭とそうでない家庭があり、その結果、電線が通じている家庭とそうでない家庭がある。
- ④ 補償問題が未解決であるため、タンジュン・バリット村の10世帯は、1998年に、法律支援事務所の支援を得て、タンジュン・パティ地方裁判所に提訴した。地裁判決では、補償要求の対象とされた47区画の内、3区画について補償の支払いが認められたに過ぎなかった。そのため、住民側は、これを不服として、最高裁判所に上訴している。
- ⑤ 一時は水底に沈んだタンジュン・バリット村であるが、現在は、姿を現してしまっている。道路脇には廃屋や住宅跡地が露呈し、湖上には伐採されないうままに残された枯れ木が延々と広がっている。また、一部の住民が、移転先では飲料水の確保が難しいために、姿を現した旧村落に戻り始めている。

(2) タンジュン・パウ村

- ① タンジュン・パウ村の移転先であるリンボ・ダタ地区とは、本来「平坦な森」を意味する。しかし、実際の移転地は起伏の激しい地域で、決して平坦ではなかった。これは、住民が希望していた本来のリンボ・ダタ地区から、数キロメートル離れたところで居住地区が造成された結果である。
- ② 政府の当初の約束では、1世帯あたり、0・1ヘクタールの住宅地、0・4ヘクタールの畑地、2ヘクタールのゴム園が供与され、移転した際には、ゴムの木はすでに育っており、数年で収穫できる状態であるということであった。

しかし、実際に与えられたのは、住宅地と不毛の畑地のみで、ゴムの木はまったくといっていいほど育っていなかった。当初計画されていたゴム園からの収入がないため、村民は経済基盤を確立できておらず、コメ・ココナツ・バナナ・魚・その他の日用品のすべてを買いねばならず、村民の出費はかさむ一方である。

そして、移転前は自分の所有するゴム園からの収入で生計を立てていたが、移転後は、現金収入を得るために、他人の畑で農業労働者として働かざるを得なくなった者や岩を砕いて土木工事用に売る者も出ており、女性とて例外ではない。このような状況は、以前の村では見られず、住民の置かれている経済状況は極めて厳しい。

例えば、2002年9月5日に既に東京地方裁判所に提訴したマルティニ氏もそのような女性の一人であり、移転前は自分のゴム園を持っていたが、移転後は、仕事がないため、午前8時から午後4時ごろまで国道沿いの岩を砕いて、買い付けにくるトラックに売るという生活をここ一年ほど続けている。マルティニ氏が夫と二人で働いて一日に集められる岩の売値は、多くて2万5000ルピア（312.5円）程度であり、その岩もいつ売れるかわからない状態である。マルティニ氏の21歳になる長男は、高校の成績が優秀だったにもかかわらず、経済状態が逼迫し、学費がつづかなかったために大学進学はできなかった。マルティニ氏は

「移転せず、ゴム園からの収入があれば、いまごろ息子を大学に通わせることができたのに」

と移転したことを後悔している。

- ③ 移転地における飲料水不足の問題も、深刻である。移転直後、井戸に水があると住民はよろこんだが、実は雨水が溜まっただけで、雨が降らなければすぐに涸れてしまうものだった。その後水問題解決のため、州政府の資金で水道が引かれたが、水源地が土砂で埋まっしまい、まったく機能しなかった。

また、OECFの援助資金で村内13カ所に井戸、洗濯場、トイレが造られた。しかし、OECFの援助資金で造られた井戸は、いずれも赤茶けた水が出るばかりで、飲用には適さない。これらの井戸は水道施設としてほとんどが役に立っていないのである。

そのため、わき水を取水し、ポリバケツに入れて、手押し車で家屋まで運んでいるが、その湧き水も、やはり赤茶けており、飲料に適していない。さらに、一番近い小川でも往復で約10キロメートルあり、村民は、朝夕、飲

料水の確保・入浴のために、約10キロメートルを歩かなければならない。
また、乾期には、ポリタンク入りの飲料水を購入せざるを得ない。

このように水道設備や井戸の造成事業が失敗した原因の一つは、事業を請け負った業者が住民の意見を聞かず、しかも一方的に手抜き工事を進めたことが挙げられる。

- ③ 未だに補償問題が未解決であるため、住民67世帯が、2000年5月24日に、総額11億4500万ルピアの損害補償を求めて、タンジュン・パティ地方裁判所に提訴した。訴えの趣旨は、1991年4月19日に、補償委員会と村落指導者との間の協議により、住宅・農地・作物などへの補償について合意されていたにもかかわらず、この合意は守られないまま、これらの資産を水没させたのは違法であるというもので、1998年以来蒙った損害総額が8億8087万250ルピアにのぼるとして、これに年率13パーセントの利子を加味して、総額11億4500万ルピアの損害賠償の支払いを要求している。
- ④ インドネシア共和国政府によって建設されたモスクは、手狭であり、住民を収容できないため、その隣に住民の手によって新たなモスクを建設せざるをえなくなった。
- ⑤ このほか、慣習法に基づく共有地が失われ、移転問題に対処できなかったために慣習法指導者に敬意が払われなくなり、これまでの社会関係が失われるといった問題も生じている。

(3) タンジュン・アライ村

タンジュン・アライ村の状況も他の村落と同様である。

さらに、タンジュン・アライ村など、幾つかの移住地では、家屋の屋根は、アスベスト製であり、住民の健康への被害が憂慮されている。

(4) コト・トゥオ村

- ① コト・トゥオ村の最大の問題は、最大水位85メートルの際には村の大部分が冠水してしまい、逆に低水位の際には水辺から遠く隔たってしまうという点にある。
- ② この村落の状況も他の村落の状況と概ね同様である。
たとえば、依然として214区画について補償問題が未解決であり、ゴムの木は植えられていない。また、村民たちには、3年間は電気代は無料であるという約束がされていたが、初年度から電気代を徴収されている。また、生活難のため、多くの村民がマレーシアやシンガポールに出稼ぎに行っている。こうした状況の下で、この村では、将来の収入源として漁業に期待して、

幾つかの世帯が漁船を造っている。しかし、樹木を伐採しないまま、コトパンジャン・ダムに貯水した結果、樹木の腐敗・富栄養化などによって、水質が悪化してきており、貯水池漁業の見通しは極めて厳しい状況にある。

(5) ムアラ・タクス村

状況は、他の村落と概ね同様である。

この村落においては、約60区画の補償問題が未解決であり、現在、その問題を巡ってバンキナン地方裁判所に提訴している。

(6) ムアラ・マハット・バル村

状況は、他の村落と概ね同様である。

ムアラ・マハット・バル村は、住民中核農園方式（私企業が開設した農園に移住民を招致し、農地を提供すると共に、そこで栽培されたゴム・パーム油などの生産物の買い取りを保障する方式）で住民の移転が行われた。コトパンジャン・ダム貯水池から立ち退かされた各世帯に2ヘクタールの油ヤシ農園が用意された。しかし、本来ならこの2ヘクタールの農園は経済基盤支援のため無料で供与されるべきであったが、実際には有料であった。

さらに、こうした油ヤシ農園に移された人々も、パーム油の国際価格の下落のために、生活困難の状態に陥っている。

(7) グヌン・ブンス村

状況は、概ね他の村落と同様である。

(8) タンジュン村

① このタンジュン村は、JICAが東電設計に作成を委託したフィージビリティ・スタディにおいては水没対象村落としては挙げられていない。しかし、現実には、このタンジュン村をはじめとして3か村以上の人々がコトパンジャン・ダム建設の影響を受けている。

② この村では、ダム貯水池の造成により、45戸が水没した。これらの水没世帯への補償は現実には支払われず、代替地さえも用意されなかった。また、350世帯が一時的に冠水被害を被った。そして、村民たちは、冠水の恐れのあることについては、政府により事前に何も知らされていなかった。そのため、これらの世帯は、将来的な冠水の恐れを避けるために高台に移転せざるを得なかった。しかし、この移転費用については何らの政府支援もない。

(9) バルアン村

バルアン村は、コトパンジャン・ダム建設に伴う移転はなかったが、ダム貯水池の造成により交通難の状態に置かれている。つまり、かつてはマハット川の川幅が40メートルで浅かったために車で容易に横断でき、国道にア

クセスできたのであるが、現在ではダム貯水池の幅員が400メートルにもなったために、15キロメートルも迂回しなければ国道に出られない。そのため、すべてが物価高となり、また電力供給施設は設けられていない。

(10) コト・ムスジッド村

コト・ムスジッド村の状況も概ね他の村落と同様であるが、この村のゴム園には、比較的多くのゴムの苗木が見られる。しかし、この苗木はインドネシア共和国政府によって植えられたものではなく、住民自身が植えたものである。また、この村では移転先における土地配分がくじ引きによってなされたことから、ゴム樹木の育成には不適當な湿地を割り当てられた住民は、生活再建の目処が立たないままである。このような湿地には、今のところ、雑草が生い茂ったままである。そして、幸いにもゴム樹木の育成に適した土地を割り当てられ、そこにゴム苗木を植えることができた住民にしても、ゴム樹液を採取できるようになるためには、今後さらに相当期間を経なければならず、生計を立てていくためには困難な状況であることには変わりはない。

(11) バトゥ・ブルスラット村

① 旧バトゥ・ブルスラット村は水没した村々のうちでは最大の村であり、この旧バトゥ・ブルスラット村の住民は、2つの新村に分かれて居住することになった。その新村の一つがバトゥ・ブルスラット村であり、もう一つが(12)のラナ・スンカイ村である。このバトゥ・ブルスラット村には、約700世帯が移転しており、移住村のうちでは、最大の人口数を有している。

② バトゥ・ブルスラット村の住民が移転する際、インドネシア共和国市政府は、住民に対する補償として、1) 無料の電気供給、2) 半恒久的な家屋の供給、3) 4年間分の食料の供給、4) 収穫準備のできたゴム農園の供給などを約したが、これらの補償は未だなされていない

③ 移転の結果、住民はきわめて厳しい生活を強いられている。

移住先の土地では、陸稲を植えることも困難であり、家畜の餌となる草もろくに生えていないため、家畜を飼うことも困難である。そして、肝心のゴム園には、苗木でさえもまばらである。そのため、住民は、木材伐採、砕石・土砂採取、漁業、さらには出稼ぎなど、あらゆる代替的な生計手段により、生活を維持しようと努めているが、これらの方法によって得られる収入はごくわずかである。

そして、この村におけるもう一つの深刻な問題は、安全な飲料水の確保が難しいという点にある。この村には、川らしいものはなく、そのため、清潔な水の確保が極めて困難な状況にある。

(12) ラナ・スンカイ村

- ① ラナ・スンカイ村は、前述のとおり、旧バトゥ・ブルスラット村の住民の一部により構成される。
- ② ラナ・スンカイ村においても、住民移転時は、ゴム園には苗木でさえも植えられておらず、そのため、住民は、移転と同時に収入源の欠如という問題に直面した。

現在、いくつかの土地でゴムの苗木の植付けが始まってはいるが、樹液を収穫できるようになるまでは、相当期間待たねばならず、住民らは出稼ぎなどで生計を立てなければならない状態である

- ③ この村の居住条件は、他の村々と同様、劣悪そのものである。熱帯林を剥ぎ取った土地は痩せており、水利も悪く、飲料水の確保が困難である。また、電気は引かれておらず、住民たちは、現在にいたるまで、ランプを使用している。

2 自然生態系の被害

コトパンジャン・ダム貯水池周辺のスマトラゾウ、スマトラトラ、マレーバク各個体群を含む自然生態系には以下のような被害が生じた。

(1) ①熱帯林減少の現状

熱帯林は、地球の陸地の7%を覆っているにすぎないが、ここには地球上の生物の50～80%に相当する3,000万種以上の生物が生息するといわれている。とりわけ熱帯多雨林は豊富な動植物群が生息する生物の宝庫となっている。

地球上の熱帯林の面積は、過去には24.5×10⁶平方キロメートルあり陸地面積の約16%を占めていたが、1975年にはその42%程度が伐採され、1990年には17×10⁶平方キロメートルにまで減少した。このような熱帯林の減少は、主に人間の経済活動により引き起こされ、乱伐による大規模な森林面積の減少は地球環境に多大な影響を及ぼしていると考えられている。

②動植物の相互作用

熱帯林では、風媒花をつける植物は温帯林に比較して少なく、多くの植物が動物を送粉者として利用している。種子散布についても動物が重要な役割を果たしており、密接な動植物の相互作用がみられる。

一方で、種子や稚樹には高い動物の被食圧がかかる。東南アジアの熱帯林では、数年から十数年の間隔で森林を構成する多くの個体が数か月の期間に集中して開花する現象が知られており、一斉開花と呼ばれている。これは、結実周期を不定期にし、結実しない期間に動物の個体数を減少させ、結実する際には一斉に結実することによって動物が食べきれない大量の種子を一度に生産し、

一部の種子を動物の食害から守ろうとするものである。一斉開花とこれに続く一斉結実時には昆虫の爆発的な増加や、動物の個体数や繁殖率の増加が認められている。このように、熱帯林の生態系は微妙なバランスの上に成り立っている。

③熱帯林破壊による環境への影響

熱帯林の伐採は、森林の環境形成作用を変化させ、流出する水や土砂の量に影響を及ぼす。

森林では、太陽による放射エネルギーの大半が蒸発散潜熱に配分されており、この割合は日量で約7割に達している。森林が伐採されると、潜熱への配分が低下し顕熱エネルギーが増大することにより、結果として気温の上昇がもたらされる。さらに、大陸上の水蒸気の循環システムが変化し、熱帯林を維持している現在の気候が失われて、森林の再生ができなくなるとされている。

さらに、熱帯林では、一年間に 16.8×10^{12} kg の炭素を光合成により固定しているといわれており、熱帯林は地球の二酸化炭素濃度を決定する重要な役割を担っている。したがって、熱帯林の破壊が地球温暖化促進要因となる。

④熱帯林における生物多様性の減少

東南アジアの熱帯林は、地史的に種を絶滅させるようなきびしい気候変動がなかったため、熱帯アフリカなどの他の地域と比較して種類が多い。このような東南アジアの熱帯林において、面積の減少と分断化は、個体数を激減させ、種の絶滅の危険性を高める。熱帯林生態系の特徴は、多様な樹木と、それに相互依存している多様な生物群にあり、これらの全体が保全されてはじめて生物多様性の保全が可能である。

現在地球上に存在する哺乳類約4,000種、鳥類9,000種のうち30%以上は熱帯林に生息している。熱帯林は野生生成物の宝庫であるが、熱帯林の急速な減少は、数多くの野生動植物を着実に絶滅の危機に追い込みつつある。

熱帯林の野生生物は、食物資源の多さに対応して、食性は多様に分化し、それぞれの種で生息場所のすみわけや、活動時間帯のずれなどにより、少しずつ異なる生態的地位を獲得することによって、熱帯林の多様な哺乳類の共存が可能となっている。

熱帯林の減少に伴って野生動物の生息地は減少するが、その影響の仕方には2つの側面がある。1つは生息地面積のトータルな減少による影響であり、もう1つは生息地が孤立化、断片化されることによる影響である。前者は、一般に大きな行動圏をもち、単独性が強く、繁殖能力が低いなどの特徴を有している「面積に敏感な種」と呼ばれる動物群に多い。

後者については、熱帯林は、通常虫食い状の部分が徐々に拡大することによって進行することから、これが森林の孤立化もしくは断片化を招き、間接的もしくは直接的な影響により、野生生物の多様性が失われていく。

熱帯林に生息している多種多様な昆虫についても、熱帯林の減少と細片化がその生息環境に影響を及ぼしている。

⑤熱帯林の再生

熱帯林の修復には、自然の生物遷移による自然修復と、人手を加えて遷移を進める人工修復がある。

1883年の大噴火により植生が全て破壊されてしまったインドネシア共和国のクラカタウ島（現在はラカタ島）に、自然修復の代表的な例を見ることが出来る。噴火後100年に行われた調査では、その遷移過程は大変複雑なものであることがわかっている。

いろいろな先駆樹種や後から侵入する植物種が、多様性の高い森林を形成するまでには更に数百年が必要と考えられている。

これに対し、やせた土地における無計画な焼畑農耕では、森林はたちまちチガヤ草原と化して砂漠化が進行してしまうが、伝統的な習慣や技術に裏づけされた焼畑跡地においては、森林の回復が速やかに進行する。これは破壊されていない森林と、破壊されてからの時間が異なる小面積の森林とが混在することによって、若い二次林に種子が供給されるためと考えられている。

コトパンジャン・ダムのような大規模な開発は、それ自体が熱帯林の大量破壊であるのみならず、その回復をも困難にする。

(以上「熱帯林の減少」 環境庁地球環境部監修より)。

(2) コトパンジャン・ダム建設により破壊された自然生態系

コトパンジャン・ダムの建設にともなう建設道路の設置により、生態系は分断され、野生生物の生息域も分断された。また、水没地域の住民の移転に伴い周辺の森林が開拓され、野生生物の生息域が失われた。さらに、貯水により124平方キロメートルの土地が水没した。これにより地域の生態系は回復しがたい損害を被った。

スマトラトラ、スマトラゾウなど大型動物は、小動物よりも絶滅しやすい。身体の大きな動物は、生命を維持するために大量の食物を必要とし、その大量の食物を採るために、広い生息域を必要とする。それだけに、食物が減ったり生息域が狭められたときにダメージを受けやすいのである。

また、スマトラトラのように草食動物を食べることにより生きている肉食動物の数は、もともと食糧となる草食動物に比べ数が少ない。これら大型動物が

生息域の分断、破壊により決定的な損害を被った。

また、移動のできない植物は、伐採されることもなく水没し、移動範囲の狭い小動物は水死した。

肉食獣の減少と森林破壊のため、人間の生息域に出没するイノシシのみが増加した。

カンパル・カナン川に生息していた回遊性の魚類は、コトパンジャン・ダムサイトによりその遡上を阻害されている。

(3) スマトラゾウ個体群

① インドネシアでは、独立前からジャワ島の人口過密を解消するため、周辺諸島への移住政策が採られてきた。独立後インドネシア政府は、これを受け継ぎ、スマトラ、カリマンタン、スラウェシ各島への移住計画を進めてきた。移住民は、森林を切り開き、そこに畑、住居を造る。そのため、1980年代に入り、スマトラ島では、南部のランプン州をはじめ、中部のリアウ州でも先住のスマトラゾウと移住民とのトラブルが起こるようになった。生息域を奪われたゾウが食糧を求めて、移住民の造った畑、プランテーションを荒らし、住民にも危害を加えるという事態が生ずるようになった。

これに対し、ランプン州では1985年から調教済のゾウをタイから迎え野生ゾウを飼育、訓練を始めた。インドネシア政府も1989年7月からスマトラ島各州にセンターをつくり、野生ゾウを集め飼い慣らし、森林作業に使う計画を進めるなど、急速に野生ゾウの生息域は奪われてきた。

② リアウ州には野生生物保護指定区が4カ所あり、バク、サイと共に保護されているが、コトパンジャン・ダム建設区域はこれら保護区に属していない。

しかし、1984年のフィジビリティ調査では、スマトラゾウは、ダム建設前、ムアラタクス遺跡付近でよく目撃され、同遺跡の北方、カンパル・カナン川対岸の8.5 km奥地が生息地と推測されている。

コトパンジャン・ダム建設にあたり、1988年にリアウ大学が被告東電設計の委託を受けて行った調査によれば、「カンパル郡の野生生物生息地である低湿地帯は、近年、移住地、アブラヤシおよびゴム農園、焼き畑用地、およびその他の開発事業のために、開拓されつつある。そのため、野生動物はパニック状態にあり、ストレスを受け、生殖・増殖はおびやかされ、出生率は極めて低い。また、死亡率が非常に高いため、このような生息環境は、全体的に非常に危険な状態にある。」と指摘されている。

同調査によれば、1985年のカンパル郡に於けるゾウの生息数は50頭から100頭であったのが、1987年には27頭から50頭に急速に減少

しているのである。

- ③ コトパンジャン・ダム建設、貯水は、これら減少するスマトラゾウに壊滅的影響を与えた。

カンパル郡に生息するスマトラゾウは、タンジュン村、ムアラ・タクス村、コト・トゥオ村、ポンカイ村、バトゥ・ブルスラット村、タンジュン・アライ村の森を回遊路として、24～50頭の群れがいた。上記村は、いずれも貯水により水没した。

そのため、リアウ州政府は貯水にあたり、ゾウの移転を計画した。

1992年1月4日、西スマトラ・リアウ・ピキトゥリン電力公社とリアウ州森林局地域事務所リアウ州自然資源保護支局との間の協定に基づき、1992年1月1日～1992年12月31日の予定で、リアウ州自然資源保護支局による象の捕獲と移住の作業が開始された。捕獲された象は、1983年動物保護区に指定されたギアム・シアク・ワチル動物保護区で解放される計画であった。1993年5月30日、作業は完了した（第一期捕獲作業）。そして、この間、雄11頭、雌20頭の合計31頭が捕獲された。その内訳は0～3頭の子象3頭、4～16歳の成長期の象19頭、17歳以上の成年象9頭である。

次に、1994年～1995年にかけて、リアウ州自然資源環境保護支局による第二期捕獲作業が行われ、雄3頭、雌2頭の合計5頭が捕獲された。その内訳は成長期の象3頭、成年象2頭である。

以上は、西スマトラ・リアウ・ピキトゥリン電力公社とリアウ州森林局地域事務所リアウ州自然資源保護支局の報告の内容であるが、実際には、スバンガゾウ訓練所から連れてきたゾウをあてることにより、捕獲されたゾウの数は6頭水増しされ、捕獲現場で死んだゾウの代わりにされた。

また、本来ならば、象は、ギアム・シアク・ワチル動物保護区で解放されるはずであったが、同保護区で解放された象は1頭もない。

第一期捕獲作業においては、捕獲作業中に数頭の象が死亡し、2頭の象がタナプティ村のスバンガ象訓練所近辺に放された他は、スバンガ象訓練所に運ばれた。そして、第二期捕獲作業においては、全ての象がスバンガ象訓練所に運ばれた。

そして、象訓練所といっても、それは名ばかりで、その実態は象を虐殺する施設にすぎない。訓練所内において多くの象は死亡し、数頭の象が生存しているにすぎない。

ゾウが動物保護区に移されることなく、スバンガゾウ訓練所に収容された

のは、飼い慣らしたゾウをその後の捕獲作業にあたって、新たに捕獲したゾウと偽り、ゾウ捕獲のための予算を獲得するためである。

このように、コトパンジャン・ダム建設計画によって、ゾウ个体群の生息域を破壊したのみならず、かろうじて生存可能性のあった動物保護区への移転もなされず、コトパンジャン・ダム貯水流域に生息していた多くの象が死に追いやられたのである。

④ また、捕獲を免れたゾウは、ダム貯水池により回遊路を遮断されたため、群れが孤立化し、2～5頭の少数団で行動するに至った。そして生息地を狭められたゆえに食糧確保も困難で、凶暴化し、住民の畑に出没し、住民とのトラブルを引き起こし、上記のとおり、1頭の象が射殺されるなどの極めて悲惨な事態が起きている。

(4) スマトラトラ

1988年にリアウ大学が被告東電設計の委託を受けて行った調査によれば、コトパンジャン・ダムの建設により影響を受ける希少種のひとつとしてスマトラトラがあげられている。

しかし、コトパンジャン・ダム建設にあたっては、スマトラトラに対する何らの対応もとられなかった。その結果、1997年に開始された貯水により、スマトラトラは数少ない生息地分断、破壊され、絶滅の危機に瀕している。

(5) マレーバク

マレーバクもスマトラトラ同様に何らの対策もこうじられることなく、生息地分断、破壊され、絶滅の危機に瀕している。

(6) スマトラ森林ヤギ

この野生ヤギは、原生林に生息する。この希少種は、従来から人間活動の広がりによって生息環境を奪われ、生息数を減らしてきたが、コトパンジャン・ダムの貯水と周辺の森林伐採により、ほとんど見かけることがなくなった。

(7) マレーグマ

このクマの主要な食べ物は、高い木の上の蜂の巣から得られる蜂蜜である。

しかし、コトパンジャン・ダムの貯水により、高木が水没ないし立ち枯れし、また貯水池周辺の高木が、主として移転住民のためのゴム園の造成目的のため伐採されてしまったため、食物が失われ、急速に個体数が減少している。

(8) サイチョウ

この鳥は、巣作りのために高い樹木を必要とする。しかし、上出のようにコトパンジャン・ダム周辺では、高木は姿を消してしまった。そのため、サイチョウの生息環境は大幅に失われた。

(9) テナガザル

テナガザルは原生林を好み、かつてはコトパンジャン地域の森林に多数生息していた。しかし、森林が失われた今日、テナガザルの姿を見かけることはほとんどなくなった。

(10) パティン他の魚類

カンパル・カナン川には、パティン、バラウ、タパ、セラリス他の回遊性を有する魚類が生息しているが、コトパンジャン・ダムサイトの完成によりその遡上を阻害され、急速にその数を減らしている。

3 コトパンジャン・ダム建設による被害のまとめ

住民の居住する各村落の状況は以上のとおりであるが、住民らに生じた被害を類型化すると次のとおりになる。

(1) 移住先の劣悪な環境

さらに、住民移住地の多くは、熱帯林を切り開いて、ブルドーザーで造成されたため、表土が洗い流されて、赤土状のラテライトが剥き出しの状態であり、そのような土地状況では、持続的農業は、不可能である。また、油ヤシ農園に移された人々も、パーム油の国際価格の下落のために、生活困難の状態に陥っている。

しかも、ダム貯水池周辺の住民移住地では、約束された2ヘクタールのゴム園が造成されていない。そのため、移住者は、収入源のない状態に追い込まれている。

そして、ダム貯水池では、樹木を取り除かないままに貯水されてしまった。そのため、貯水池に残された樹木が腐食して、水質悪化が進行しており、富栄養化現象が加速されている。すでに魚類の大量死という問題も発生しており。

これらの樹木の残った浅水域は、ボウフラの恰好の生息環境を作り出している。そのため、今後、マラリアの大量発生のおそれがある。

移住地とゴム園の造成のために集水域での森林伐採が大々的に行われており、そのため貯水池への土砂の流入が加速されている。

コトパンジャン・ダム下流地域では、有機栄養分を含んだ水が流れてこないため、土地の肥沃度は、年々低下していくことは避けられない。

(2) 飲料水の確保の困難性

O E C F 融資で作られた移住先の井戸が、全く使い物にならない。これらの

井戸の大多数は、赤茶けた色で、飲用には適さず、住民の飲料水の確保が困難な状態にある。

(3) 深刻な収入難

今日、コトパンジャン・ダム貯水池の周辺の移住地のゴム園には10パーセントほどしか苗木は植えられておらず、しかもそれらは幼木で樹液が得られるまでには成長していない。

そのため、現地住民は、深刻な収入難に直面している。移住地では生活できないために、家族全体で、ないしは家族の一部が、ジャカルタ、さらにはシンガポール、マレーシアなどへと出稼ぎに出ているケースも多い。

移住地に留まっている現地住民は近隣のプランテーションに賃金労働者として働きに出るか、ないしは採石、薪・籐集めなどで、辛うじて食いつないでいる。また、前述のように、ダム貯水池の水質の悪化により、漁業も成り立たない。いずれにせよ、現地住民の収入はわずかで、子供を学校に通わせる余裕のない現地住民も多い。

(4) ミナンカバウ社会の破壊

① ミナンカバウ社会

ミナンカバウ族とはスマトラ島の中部高地一帯に居住する民族の総称である。ミナンカバウ族の居住地域は西スマトラ州からリアウ州にかけて広がっており、コトパンジャン・ダム貯水流域周辺に居住する原告らもミナンカバウ族に属する。

リアウ州においては、低地の沿岸部に居住するのはマレー系の人々であるが、内陸部に居住するのはミナンカバウ系の人々であり、ミナンカバウ社会は、マレー系社会やジャワ系社会とは異なる社会・経済・政治組織を有する。

まず、社会的な存在形態という点からすると、ミナンカバウ族の人々は、地域ごとに分散しており、それぞれに伝統的で位置的な村落共同体を形成している。各村落はいくつかの氏族が集まって形成されており、それぞれの氏族には1名の氏長がいる。ミナンカバウ社会の代表的な特徴の一つはその独特な家屋に現れており、屋根に反りのある高床式の長大家屋はよく知られているところである。そして、村落の中心には、モスクとルマ・ガダン（「大きな家」の意味）があり、ルマ・ガダンにおいては、村民により集会が開かれたり、結婚式や葬儀などの行事が催される。さらに、ミナンカバウ族は母系社会を採用していることでも広く知られている。つまり、この社会では、親族の血縁関係は母系氏族においてたどられており、したがって、子供は母方の氏族に属し、財産も母系氏族において相続されている。

しかし、社会統治という観点から眺めれば、ミナンカバウ社会は母系氏族のなかの伯父たちによって取り仕切られており、それぞれの村落共同体は、基本的には、伝統的・宗教的指導者が中心となって形成される集团的合議組織である村落協議会によって統治・運営されている。この村落協議会は古老が中心となり、これにイスラム長老・学識経験者が加わって、これら3者によって構成されている。そして、統治・運営の基準となるのが慣習法とイスラム法であり、村落共同体の重要事項は、慣習法とイスラム法を基準として、上記の伝統的・宗教的指導者のイニシアチブの下に住民参加の集会で決定される。

つぎに、土地所有の形態であるが、私有財産制度ではなく、基本的には集团的土地所有制度の上に成り立っている。つまり、土地の所有権そのものは村落共同体の属しており、ここの人々にはその利用権が認められているのである。この土地所有制度の点で特徴的なのが、ウラヤット地と呼ばれる慣習的共有地である。ウラヤット地は、先祖伝来の入会地であり、村落共同体全体の利用に供されている。このため、ウラヤット地は相続地とも呼ばれている。そして、このウラヤット地は、主としてゴム園として利用されているが、その大部分は、将来的な利用の発生に備えて、森林と利用が保留されている。また、ウラヤット地は売買の対象とされていない。

ミナンカバウ族は、インドネシアでも有数の信仰心の厚いイスラム教徒であって、各村落には荘厳なモスクが建っている。このモスクは各村落の住民の浄罪によって建てられたものである。つまり、土地の形態での寄進と金銭の形態での寄進によって建立されたものであり。こうしたことから、モスクが建立されている土地（イスラム教公有地）も売買の対象とされていない。原告らが属するミナンカバウ族の社会は、概要以上のようなものである。

② しかしながら、以上のようなミナンカバウ社会は、コトパンジャン・ダム建設に伴う現地住民の強制移住によって、破壊された。

i まず、強制的に移転させられた住民には、世帯毎に代替地が与えられることになった。しかし、前述のように、ミナンカバウ社会においては、土地所有の形態は、村落が土地を所有する集团的土地所有の形態をとっており、そもそも世帯毎に土地を所有するという概念は存在しなかった。その結果、ミナンカバウ社会における集团的土地所有形態は移住によって維持し得なくなった。

また、移住を契機として、伝統的・宗教的指導者のイニシアチブが失われ、従来から慣習的に行われていた統治システムが機能しなくなっている。

ii また、インドネシア共和国政府によって提供された住宅は、ミナンカバウ社会における伝統的な建築様式である高床式の家屋ではなく、土間形式の粗末な木造住宅（縦6メートル、横6メートル）であり、住民にいわせると「これではまるでヤギ小屋である」とのことである。

iii さらに、インドネシア共和国政府によって建設されたモスクは、例えばモスクの方向が間違っていたり、住民を収容しきれないなど、モスクの体をなさないものであった。また、ルマ・ガダンも存在しない。

(5) 補償問題の未解決

コトパンジャン・ダムに本格的な貯水が開始された時点においては、未だに住民に対する立ち退き補償と再定住の問題は片付いていなかった。

コトパンジャン・ダムによって立ち退かされた住民に対しては、当初から低い補償基準が押し付けられた上に、補償金の多くが、政府関係者によりピンハネされてしまったのである。そのため、移住民の実際の受け取り額は、極めて少なかった。しかも、住民のうちには、未だに補償金を受け取っていない人々がいる。これらの人々は、現在、法廷闘争を行っている。

(6) 自然環境の破壊

コトパンジャン・ダム貯水池及びその周辺は、元来、豊かな自然環境を有しており、熱帯動植物の宝庫であったが、コトパンジャン・ダムへの貯水により、その自然環境が破壊され、とりわけ野生動物を絶滅の危機に追いやった。

第7 被告らの違法有責性

1 コトパンジャン・ダム建設自体の違法性

「第6 コトパンジャン・ダム建設によって生じた被害」において既述したとおり、原告らには甚大な被害が生じており、これら被害は、全てコトパンジャン・ダム建設によってもたらされたものである。これらをまとめると以下のとおりになる。

(1) コトパンジャン・ダム建設による現地住民の生活被害

現地住民の移転先は劣悪な環境であり、決して従前どおりの生活が実現できるものではなく、現地住民らの生活はまさに危機に瀕している。

(2) コトパンジャン・ダム建設による共同体・独自文化の破壊

すなわち原告らの属するミナンカバウ文化の破壊である。

(3) 野生生物を含む自然生態系の破壊

コトパンジャン・ダム建設による建設道路の新設、岩石の採取等および建設に伴い非自発的移住を強いられた住民のための森林伐採により生態系は破壊さ

れ、貯水地域は水没した。これによりスマトラゾウ、スマトラトラ、マレーバク等は種そのものが絶滅の危機に瀕している。

(4) 非自発的移転の違法性

① 本件の貯水流域は極めて広大であって、多くの部落が重要な経済資産・労働手段・伝来の貴重な民族文化遺産もろともに水没させられた。結果、

伝統的共同体は崩壊し、家族経済も殆ど崩壊してしまった。それはまさにエコサイド（自然圧殺）でありエスノサイド（民族絶滅）であり、ある意味ではジェノサイド（集団殺害）ですらあった。

② 予想されたこのような事態の到来を恐れた現地住民は、被告日本国側によるプロジェクト・ファインディングの開始後、約10年後に至ってこのプロジェクトが現実動き出し、明るみに出た時から、明確に、これに対して強く反対した。

しかしスハルト政権による強権政治の体制下では、これらの声は弾圧され、あるいは一部特権層への懐柔を梃子とした工作等により、これら現地住民の意思は抑圧され、住民は全く非自発的に移転せしめられていったのである。

③ ところで、そもそも一定の住民が、その居住空間において住み続ける基本的権利は、「居住権」として、すでに国際的に確立された権利として承認されており、そして、世界人権宣言17条2項「何人も、ほしいままに自己の財産を奪われることはない」から導き出される必然的な帰結は「強制移住の禁止」の原則と「住民同意」の原則である。これらの原則はいくつかの国際条約や国際機関の宣言・ガイドラインのうちにも確認されてきているところである。

i 国際人権規約

その典型が、被告日本国も締結批准している国際人権規約である。すなわち1966年国連総会において採択された「経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約」、いわゆる「社会権規約」（国際人権A規約）は、その11条1項において

「この規約の締約国は、自己及びその家族のための適切な・・・住居を内容とする適切な生活水準についての、ならびに生活条件の不断の改善についてのすべての者の権利を認める。」

と宣明している。

そして、「人間固有の尊厳に由来するこの権利」（規約前文第2パラグラフ）を実効あらしむるために設けられた規約委員会制度において、「居住権」の重要性は繰り返し確認され、人権委員会に報告・承認され、更に

は国連社会経済理事会に報告され承認されて、これらは国連人権規約上の規範力を付与されてきた。

例えば、1993年3月には第49回国連人権委員会総会は「強制立ち退きに関する決議」を行った。これによると

「強制立ち退きなる行為は、人や家族や集団を無理矢理に家庭やコミュニティから連れ去ることによって、ホームレス状態を悪化させ、住宅と生活条件を劣悪にするものである。」

「強制立ち退きとホームレス問題は、社会的な対立と不平等を先鋭化し、常に社会の中で最も貧しくまた社会的経済的環境的政治的に、最も不遇で弱い立場にある人々に対して影響するものである。」

として

「強制立ち退きを防ぐ究極の法的責任は政府にある」

「国際機関は、適切な保護や補償のないまま、人々を大規模に追い立てたり移転させたりする事業に関わるのを、慎重に避けるべきである。」

と、宣言している。

あるいは、

「強制立ち退き行為は、人権なかんづく適切な住宅への権利に対する重大な違反である。」

と宣明された。

国連人権委員会が、このように固有の人権として居住権を宣明するに至ったのは、「開発」の名による都市部の再開発事業や巨大ダム建設による強制立ち退きの結果による大規模な難民状況による非人間的悲慘が、深刻に憂慮されたことによる。

ii ILO条約

国際労働機関（以下、「ILO」という）は、1957年6月26日、

「独立国における先住民その他の部族民の保護と統合に関する条約」（ILO107号条約）を採択した。その目的は、先住民、少数民族などの伝統的社会のために、この社会全体による集団的所有権ともいべきものが尊重されるべきことを定めることにあった。

しかしながら、この条約には、名称からも知られるように、統合主義の考え方が導入されていた。そのため、条約から統合主義の色彩を取り除くべきであるとの批判がなされてきた。

このような批判に応じて、条約を改正するための交渉が積み重ねられてきた結果、1989年6月24日に新条約が採択された。新条約の名称は、「独立国における先住民その他の部族民に関する条約」(ILO169号条約)と改められた。新条約では、先住民社会の土地所有権と利用権の尊重義務について、14項1項には、次のように規定されている。

「関係住民が伝統的に占有している土地に対して、これらの住民の所有権が、認められなければならない。また、関係住民によって排他的に占有されているのではないが、これらの住民が生存上の必要および伝統的な活動のために長年にわたって出入りしてきている土地の利用権を保護するための措置が、適当な場合には取られなければならない。この点で、遊牧民と移動耕作者の立場に対して、特別な配慮が払われなければならない。」

そして、「強制移住の禁止」の原則と「住民同意」の原則については、同条約の16条において、以下のような内容で規定されている。

- 「(一) この条の以下の各項に従うことを条件として、関係住民は、彼らが占有している土地から立ち退かされてはならない。
- (二) 例外的な措置として、これらの住民の立ち退きが必要であると判断される場合には、このような立ち退きは、当該住民に十分な情報が与えられ、かつ彼らの自由な同意が得られるときのみ行われるものとする。彼らの同意が得られない場合には、こうした立ち退きは、適当な場合には公聴会を含めて、国内法令によって定められる適正な手続きに基づいてのみ行われるものとする。このような手続きは、関係住民の意向が十分に代表される機会を備えていなければならない。
- (三) 立ち退きのための理由がなくなる場合には、これらの住民は、可能な限り早期に、自らの伝統的な土地に帰る権利を有するものとする。
- (四) こうした帰還が不可能な場合には、これらの住民は、協定の定めるところにより、またはこのような協定がない時には、適正な手続きにより、少なくとも彼らが以前に占有していた土地に匹敵する同質の土地と法的地位を最大限に与えられなければならない。このような土地は、これらの住民の現在のニーズを満たすとともに、また将来の発展の機会を提供するにふさわしいものでなければならない。関係住民が金銭または現物での補償の方を選

ぶ場合には、彼らには、適当な保証の下に、このような補償が与えられなければならない。

(五) このような立ち退きにより何らかの損失または被害を受けた人は、十分に補償されなければならない。」

この条約は、先住民の土地所有権と利用権の尊重を定めたものである。また、日本は、この条約には加盟していない。しかしながら、ここに掲げられている基本原則と手続きは、先進国および開発途上国を問わず、また先住民の居住地域であるかどうかを問わず、世界のいずれの地域においても、当然に尊重されるべき事柄であると言える。

ii 世界銀行の非自発的移住ガイドライン

世界銀行は、1979年に、非自発的移住ガイドラインの策定作業に着手した。その結果、1980年2月には、「世界銀行融資プロジェクトにおける非自発的移住に関連した社会問題」と題された業務マニュアル書が策定された。

その後、世界銀行は、この業務マニュアル書の改訂作業に着手した。その結果、1986年10月10日には、「世界銀行融資プロジェクトにおける非自発的移住の取り扱いに関する業務政策問題」と題された業務政策覚書が作成された。

さらに、その後、世界銀行内部では、この覚書を業務指令の地位にまで高めるための検討作業が続けられた。その結果、1990年6月29日には、「非自発的移住」に関する業務指令が作成された。そして、前記の業務マニュアル書と覚書は、新たな業務指令と取り替えられることとなった。この業務指令のうちに掲げられている非自発的移住に関する基本政策は、以下のような内容である。

- (一) 非自発的移住は、移住者への悪影響が大きいが故に、可能な限り避けられるか、ないしは最小限にとどめられるべきである。
- (二) 立ち退きが不可避な場合には、移住計画が策定されるべきである。移住計画は、プロジェクト立案の不可欠の一部として位置づけられるべきである。
- (三) 移住者が、以前の生活水準および所得獲得能力を改善するか、ないしは少なくとも回復できるようにすべきである。
- (四) 立ち退き者に対しては、①立ち退きコストに見合う損失補償が行われるべきであり、②プロジェクトの利益を共有する機

会を与えられるべきであり、③移転に際して、また移転先での過渡的期間に対して、支援が供与されるべきである。

- (五) 移住による悪影響を緩和するために、社会共同体としての集団的な移住に配慮すべきであり、また社会・文化環境および自然環境への違和感を軽減するために、できるだけ近距離に移住地が設けられるべきである。
- (六) 移住計画の策定にあたっては、移住者と受け入れ住民の双方の参加が助長されるべきである。移転と再定住のプロセスにおいては、既存の社会的および文化的な組織が、活用されるべきである。
- (七) 移住地の立案にあたっては、移住者の新たな共同体が、地域の社会・経済構造に溶け込めるような形で、必要なインフラとサービスが備えられるべきである。
- (八) 移住者の受け入れ先の社会共同体が、人口増加のために被る社会的・環境的な悪影響を緩和するために、かかる共同体への支援が供与されるべきである。
- (九) 先住民、少数民族、遊牧民、その他の社会集団が、プロジェクトのために収容される土地またはその他の資源に対する非公式の慣習的権利を有しているような場合には、これらの人々に対しては、適切な代替地、インフラ、その他の補償が供与されるべきである。これらの人々が収容される土地に対して法的権原を有していないことが、これらの人々に対する補償および再定住の供与を拒否する理由となってはならない。

以上の基本政策のうち、とりわけ注目されるのは、「立ち退き者が以前に享受していた生活水準を改善するか、ないしは少なくとも回復すること」という要件が掲げられていることである。しかし、実際問題として、この要件を充足することは、極めて難しいと言わねばならない。とりわけ、河川、海浜、森林などの自然の恵みに依拠して生活していた人々を立ち退かせて、以前の生活と同等ないしはそれ以上の生活水準を確保するというようなことは、実際には困難である。

立ち退き者の生活水準の回復ないしは改善という要件を充足することが難しいことについては、世界銀行も、これを認めている。この点について、世界銀行報告書では「立ち退き」と「生活再建」の問題とを区別する必要があるとして、次のように指摘している。

「立ち退きは、あるプロジェクトが社会全体の利益のために進められるにあたって、土地その他の資産がいかに収用されるかにかかわっている。これに対して、生活再建は、立ち退かされた人々の運命にかかわっている。理論的には、これらの二つのプロセスは、それぞれが、単一の連続事業の一部を構成している。しかし、実際には、前者が、必ずしも後者を伴うとは限らない。」

要するに、これまでの移住実行においては、もっぱら「立ち退き」の側面に関心が注がれてきており、「生活再建」の側面が軽視されてきたというのである。それ故、「生活再建」という尺度から眺めるとき、報告書では、成功例がほとんどないことを認めて、次のように述べている。

「移住者が、同等ないしは生活水準を回復するという点では、成功してきているプロジェクトはあまりにも少なく、また不満足な実行状況が、未だに広く行き渡っている。投資プロジェクトの多くの結果を眺めてみると、予期されていたプロジェクト利益は得られていないし、また世界銀行の政策目標とも合致していない。」

なお、世界銀行の業務指令においては、「土地には土地を」の移住指針も掲げられている。この点については、次のように述べられている。

「経験の示すところによれば、金銭補償だけでは、通常は不十分である。……農業中心の社会基盤から立ち退かされる人々に対しては、土地基盤の移住戦略が優先されるべきである。適当な土地が確保できない場合には、雇用ないしは自営の機会を創出する方向において打ち立てられた非土地基盤戦略が用いられることもできる。」

このように、世界銀行ガイドラインにおいては、「土地には土地を」の移住指針が掲げられているのではあるが、実際には、世界銀行貸し出しプロジェクトにおいては、この移住指針は、ほとんど適用されてきておらず、大抵の場合には金銭補償にとどまってきた。世界銀行も、この事実を認めている。この点については、世界銀行報告書では、以下のように述べられている。

「農村地域における立ち退き活動の主要形態は、立ち退き世帯に代替地を提供することである。大抵の場合に、『土地には土地を』の戦略は、現金補償の支払いよりも、はるかに優れた結果をもたらしている。もっぱら金銭での補償を行うことを旨としてきた世界銀行の経験では、特に農村での立ち退きにおいては、多くの場

合にマイナスの結果に終わってしまっている。」

iii OECDの「非自発的移住ガイドライン」

世界銀行の「非自発的移住ガイドライン」においては、移住計画の立案と実施にあたっての住民参加の重要性が強調されている。しかし、立ち退き対象者の移住同意という点については何ら触れていない。それ故、世界銀行ガイドラインにおいては、住民同意が得られない場合には、国家権力を用いての強制立ち退きが行われる余地が残されている。

これに対して、経済協力開発機構（OECD）によって1991年に策定された「非自発的移住ガイドライン」（正式には、「開発プロジェクトにおける非自発的な立ち退きと移住に関する援助機関のためのガイドライン」）においては、次のように述べられている。

「プロジェクトによって影響を受ける人々の権利を保護する受け入れ可能な移住計画が含まれていない限り、援助国は住民移住を引き起こすプロジェクトを支援してはならない。」

このようにOECDガイドラインにおいては、移住対象者にとって「受け入れ可能な」移住計画が作成されていない限り、援助国は、プロジェクト支援を行ってはならないとされているのであって、ここには、住民同意の基本原則が黙示されている。この意味で、OECDガイドラインにおいては、世界銀行ガイドラインにおけるよりも、移住対象住民の人権保護の観点が一層強く反映されていると言える。

OECDガイドラインにおいてはまた、「土地には土地を」の移住指針についても、これを明確に掲げ、次のように述べられている。

「農村移住者については、『土地には土地を』のアプローチ、つまり失われた土地に少なくとも見合うような生産的潜在性を有する代替地を提供するというアプローチを助長することが望ましい。」

- ④ コトパンジャン・ダム建設にあたっては、原告らの同意は取られていない。まさに非自発的移住であって、上記のような国際条約やガイドライン等に反することは明白であり、違法である。

(5) 3条件の不履行

- ① さらに、本件においては、日本国がインドネシア共和国政府に対するODA供与にあたって、いわゆる「3条件」と呼ばれる条件を付していた。すなわち、日本国は、3条件をODA供与の前提としており、この3条件が遵守されることを条件にODA供与を行うことになっており、これは、日本国のODA史上初めてのことであった。この3条件の内容は、1999年5月1

7日の国会答弁によると、以下のとおりである。

- i 事業対象地に生息する全ての象を適切な保護区に移転するようにしなければならない。
- ii 事業により影響を受ける世帯の生活水準が移転以前と同等かそれ以上のものが確保されなければならない。
- iii 事業により影響を受ける世帯の移転合意は公正かつ平等な手続きを経て取り付けられなければならない。

なお、インドネシア共和国におけるマスコミ誌「プロスペクト」においては、3条件の内容は、以下のとおり報道されている

- i 立ち退き対象となっている全ての世帯主が、他の場所に移転する用意がある旨を、個別的に一単に共同体の指導者の同意だけでは十分ではない—表明しなければならない。
- ii 補償金の支払のための目録作成と実施にあたっては、住民は価額評価の決定過程に参加しなければならない—政府側のみで一方向的に定められてはならない。
- iii 貯水池の予定地域に生存する全ての野生生物、特に30頭の象が、良好に取り扱われ、絶滅させられてはならない。

そして、この3条件については、外務省は、「モデル・ケース」と喧伝し、上記国会質疑においても3条件が遵守されている旨答弁しているところであるが、前記第5の1記載のとおり、現実には、全く遵守されていない。

- ② そもそも3条件とは、それが履行されない場合には、ODA支出を中止するという趣旨のODA支出にあたっての前提事項であったと解されるべきものであり、日本国は、3条件が遵守されない間は、ODA支出を凍結すべき立場にあった。

そして、コトパンジャン・ダム建設によって生じた被害の実態や現地住民の対応などから明らかなおとおり、3条件は全く遵守されておらず、漫然とODA支出を凍結しないままであったのであり、日本国は、自ら付した3条件にも違反しているのである。

2 共同不法行為

第3「本訴訟の前提～ODAについて」及び第4「コトパンジャン・ダム建設を巡る事実の経過」において見たとおり、コトパンジャン・ダム建設においては、東電設計がプロジェクト・ファインディングを行い、JICAがその東電設計に委託してフィージビリティ・スタディを作成せしめ、OECSFがインドネシア共和国政府と借款契約を締結し、総額311億7700万円の円借款

契約を締結し、コトパンジャン・ダム建設に至り、その後のプロジェクト監理を東電設計が受注している。そして、円借款供与の最終的な責任主体が日本国である。

コトパンジャン・ダム建設計画は、以上のような被告ら及び日本国、東電設計の関与のもと、完遂され、その結果、第6「コトパンジャン・ダム建設によって生じた被害」記載の住民及び自然生態系に対する被害を生ぜしめたものであって、被告ら及び日本国、東電設計は、互いに関連共同性を有することは明らかである。

3 各被告らの有責性

(1) JICAの違法有責性

① フィージビリティ・スタディの作成

- i JICAは、東電設計に委託してフィージビリティ・スタディを作成させた。

そもそも、前述のように、東電設計は、コトパンジャン・ダム建設計画において、プロジェクト・ファインディングの過程から関与しており、自らがコトパンジャン・ダム建設計画の「案件探し」を行った企業であり、そのような立場にある企業は当該案件についてほぼ間違いなく「実行可能」であるとの結論を下すことは容易に想像できることである（即ち、自ら探した「案件」につき、自らが「実行可能」であるとの結論を下すのであって、いわば「お手盛り」の様なものである）。このような企業に引き続きフィージビリティ・スタディを作成させること自体に過失があるものと言わなければならない。

- ii そして、現実に東電設計の作成したフィージビリティ・スタディは、前述のとおり、極めて不備の多いものであり、JICAは、このような不備の多いフィージビリティ・スタディを再検討し、不備を是正すべき立場であったところ、漫然とそれを見過ごし、結果、現地住民らに対して甚大な被害を及ぼしたのである。

② 環境ガイドラインの遵守義務違反

- i JICAは、1991年2月に「ダム建設計画に係わる環境インパクト調査に関するガイドライン」を作成している。これはコトパンジャン・ダム建設計画のフィージビリティ・スタディ実施後に作成されたガイドラインであるが、ここでは、環境配慮について「開発プロジェクトにより著しい環境インパクトが生じるか否かを調査し、その結果を評価し、必要に応じ、環境インパクトを回避または軽減するような対策を講じる

ことである」(iii 頁)と明確に定義し、そのためのダム建設による環境影響に関わる事前評価の必要性について展開している。これは、開発プロジェクトに関わる機関が遵守すべき指針を示したものであるが、JICAは、以下のように、かかるガイドラインにも違反しているものと言わざるを得ない。

- ii まず、同ガイドラインでは、社会環境に与える影響に関するインパクト調査項目の筆頭に、住民移転についての項目を挙げ、「移転させられる住民の生活基盤の喪失、新たな移住地への社会的、文化的な適応の不安等により、移転させられるダム計画への反対運動の発生、利害関係や内政問題の派生、あるいは民族的対立の激化等がありうる。・・・移転はダム事業の成否を決定する基本的問題である。特に、少数民族が存在しているときには、問題が起こりやすい」と移転問題の重要性を指摘した上で、「対策等」として「1. 移転計画の見直し。2. 十分な経済的・文化的補償の検討。3. 事前の情報公開、伝達、対話等の検討。4. 移転先の生活、経済環境整備」などが挙げられている。

しかし、実際には本件プロジェクトに関して、移転が甚大なる被害を移転住民に及ぼしたことは「第6 コトパンジャン・ダム建設によって生じた被害」でも見たとおりであり、何ら同ガイドラインに規定されているような措置は取られなかった。

- iii また、同ガイドラインには「国際自然保護連盟 (IUCN) の Red Data Bookに絶滅危惧種あるいは希少種として記載されている種が地域内にあれば注意を要する」「当該地方に特有の種があれば慎重な考慮を要する」とし、それに対する「対策」として「動物の移住」などがあげられている。

しかしながら、コトパンジャン・ダム貯水池に生息する野生動物のうち、「移住」の措置が取られたのは、スマトラ象だけであり(それも極めて不十分な措置であった)、他の野生動物については何らの「移住」措置も取られなかったのである。

- iv 以上のように、JICAは、漫然と東電設計に対して極めて不備なフィージビリティ・スタディを造らせたのみならず、それ以降も、自ら策定したガイドラインをも遵守せず、何ら「環境インパクトを回避または軽減するような対策」を講じないままでいたのである。

(2) JBIC (OECF) の違法有責性

- ① 第4記載のとおり、OECFは、1985年・1990年・1991年の

三度にわたり、インドネシア共和国とODAの借款契約を締結しており、1990年・1991年に現地へ調査ミッションを派遣している。そして、前述の1991年9月17日、現地住民代表が来日した際、OECD担当者も現地住民代表者の応対をしている。

したがって、OECDが現地住民に被害が生じるであろうことを予見できたこと、あるいは予見していたことは、日本国と同様である。

- ② そして、OECDのODA供与は、OECDが1989年に策定した「環境配慮のためのガイドライン」にも違反する。

以前から、日本国のODA供与が世界各地で環境破壊を引き起こしているとの批判があり、そのため1985年以降、日本国における援助機関において、さまざまな環境ガイドラインが策定された。この「環境配慮のためのガイドライン」もその一つで、その序文によれば「近年、環境問題が国際的にも一層重要になってきている状況を踏まえ、環境配慮が効果的・効率的に行われることを確保する」ことを目的とし、「先方借入人が借款申請に先立ち当該案件の計画・準備段階において配慮すべき環境面の諸事項を内容としたものであり、融資機関としてのOECDの審査は借入人側が行う環境上の所要の措置等の確認がその主体となる」としている。

そして、環境配慮に際しての基準として、自然環境については「②主要な動物及び植物の生息状況に著しい影響を及ぼさないように措置されること。③貴重な動物及び植物の保護が図られるよう措置されること。」と規定され、社会環境については「既存の環境に著しい影響を及ぼさないように措置されること。」と規定されている（4頁）。

しかしながら、第5の1記載のとおり、本件においては、全く環境のための配慮がなされていないと言わざるを得ない。

OECDは、自ら策定した「環境配慮のためのガイドライン」に違反する態様で、本件ODA供与を行っていたのである。

第8 原告の被告らに対する請求権

- 1 コトパンジャン・ダム建設によりコトパンジャンの住民及び自然生態系が被っている損害は、上記第6章記載のとおりである。

これら被害の回復のために、原告は住民と共に被告ら及び日本国、東電設計に対して、別訴（東京地方裁判所平成15年（ワ）第6732号）を提起し、原状回復に向けた勧告と共に実費の支払を求めている。

原告は、本件において、被告ら及び日本国、東電設計の違法行為によって生

じた自然生態系の破壊を阻止し、また破壊された自然生態系を回復するために原告WALHIが行ってきた別紙費用一覧表記載の活動費用をインドネシア環境管理法38条2項に基づき「実費」として、請求する。

- 4 原告 WALHI が、コトパンジャン・ダム建設による自然生態系の破壊を阻止し、また破壊された自然生態系を回復するために費やした費用は、別紙実費一覧表のとおりの合計436,246,314ルピアである。平成15年11月12日現在で1円当たり78.0287ルピアであり、日本円に換算すると金5,590,844円である。

よって、原告 WALHI は、インドネシア環境管理法38条2項の「実費」として被告らに対して金559万844円の支払いを求めるものである。

- 3 ここで、本件に関して、インドネシア共和国の環境管理法38条2項の適用根拠を説明する。

- (1) 本件の費用請求は、原告 WALHI が、コトパンジャン・ダム建設に伴う自然生態系の破壊を阻止し、また破壊された自然生態系を回復するためにインドネシアにおいて支出した費用を、日本に住所地を有する被告らに請求するものであるから、まず、本件の問題が国際私法上、いかなる単位法律関係に該当するかの決定、すなわち、法律関係の性質決定が問題となる。

そこで検討すると、本件の場合、原告 WALHI と被告らとの間には、何ら契約関係が存しない。したがって、原告 WALHI の被告らに対する請求権は法定債権であるといえる。

そして、わが国の国際私法である法例をみると、法定債権は法例第11条に定められている。したがって、本件の問題は法例11条で解決すべきであるといえる。

- (2) この法例11条においては、事務管理、不当利得、不法行為という国際私法上の単位法律関係が規定されている。そこで、本件の原告 WALHI の権利の問題は、上記のいずれの単位法律概念に含まれるかが、次に問題となる。

本件の場合、コトパンジャン・ダム建設に伴う自然生態系の破壊を阻止し、また破壊された自然生態系を回復することは、本来被告らがなすべき事務であった。これを原告 WALHI が行い、それに際して支出した費用を請求しているのであるから、国際私法上、人が義務なくして他人の事務を処理した場合に、両者の間に一定の権利義務を発生せしめる制度である事務管理の概念に該当する。したがって、法例11条1項の定める事務管理に該当する。

- (3) 法例11条1項は、事務管理については「その原因たる事実の発生したる地の法律に依る」と定め、事務管理地法主義を採用している。ここで事務管理地

とは、国際私法上、事務の処理が現実に行われた地のことをいうところ、本件においては、事務の管理はインドネシアにおいて行われているので、事務管理地はインドネシアである。

したがって、本件の原告 WALHI の被告らに対する請求権については、法例 11 条 1 項より、インドネシア法が準拠法として指定されることになる。よって、本件請求に対してインドネシア法を適用することができる。

(4) そこで、インドネシア法を検討すると、上記のインドネシア共和国の環境管理法 38 条 2 項において、環境保護団体は環境機能保全のために訴訟提起する際、実際に出費した費用を請求できると定められている。

したがって、本件訴訟において、原告 WALHI はインドネシア共和国の環境管理法 38 条 2 項に基づいて、実費を請求することができるものである。

第9 結語

よって、原告 WALHI はインドネシア共和国の環境管理法 38 条 2 項の「実費」として被告らに対して金 5 5 9 万 8 4 4 円の支払いを求める。

以 上

証 拠 方 法

1 甲第 1 号証 インドネシア環境法

添 付 書 類

1 甲号証	3 通
1 訴訟委任状	1 通
2 資格証明書	2 通

当事者目録

〒12790

インドネシア共和国 ジャカルタ ジャラン・テガル・パラン・ウタラ (テガル
・パラン・ウタラ通り) No. 14

原告 インドネシア環境フォーラム (WALHI)

原告共同代表 代表 Longgena Ginting

同 副代表 Joko Waluyo

同 書記 Nur Hidayati

同 会計 Anggiarini

同 役員 Muhammad Basuki Winoto

同 役員 Budi Arianto

〒100-0004

東京都千代田区大手町1丁目4番1号

被告 国際協力銀行

被告代表者 総裁 篠 沢 恭 助

〒151-0053

東京都渋谷区代々木2丁目1番1号

被告 独立行政法人国際協力機構

被告代表者 理事長 緒 方 貞 子

原告代理人目録

〒104-0061

東京都中央区銀座5-15-18 銀座東新ビル4階（送達場所）

銀座東法律事務所 Tel 03-3545-2151 Fax 03-3545-2153

原告訴訟代理人弁護士 浅野史生

〒107-0052

東京都港区赤坂2-14-13 シャトレ赤坂5階

港合同法律事務所 Tel 03-3585-2331 Fax 03-3585-2330

原告訴訟代理人弁護士 大口昭彦

〒530-0047

大阪市北区西天満5-9-11 高橋ビル北6号館2階

共立法律事務所 Tel 06-6365-9445 Fax 06-6365-9479

原告訴訟復代理人弁護士 奥村秀二

〒451-0031

名古屋市西区1-12-12 パークサイドビル3階

名古屋イ・アンド・ジェー法律事務所 Tel 052-528-1560 Fax 052-528-1561

原告訴訟復代理人弁護士 籠橋隆明

〒103-0028

東京都中央区八重洲1-5-4 共同ビル八重洲口6階64

宮本隆彦法律事務所 Tel 03-6202-0033 Fax 03-3273-1306

原告訴訟代理人弁護士 河村健夫

〒530-0047

大阪市北区西天満3-8-13 大阪司法ビル103号

大阪法律センター法律事務所 Tel 06-6365-8141 Fax 06-6365-8134

原告訴訟代理人弁護士 沙々木 睦

〒530-0047

大阪府北区西天満6-1-2 千代田ビル別館2号館9階

上原康夫法律事務所 Tel 06-6367-5330 Fax 06-6367-5331

原告訴訟代理人弁護士 島 村 美 樹

〒160-0004

東京都新宿区四谷2-1-1第2報友ビル5階

四谷西法律事務所 Tel 03-5312-7110 Fax 03-5312-7140

原告訴訟代理人弁護士 古 川 美

〒530-0047

大阪市北区西天満4-3-25 梅田プラザビル別館902

金子・中法律事務所 Tel 06-6364-6411 Fax 06-6364-6410

原告訴訟代理人弁護士 松 浦 由 加 子

〒530-0047

大阪市北区西天満5-9-11 高橋ビル北6号館2階

共立法律事務所 Tel 06-6365-9445 Fax 06-6365-9479

原告訴訟代理人弁護士 幸 長 裕 美

費用一覧表

日付	費用内訳	単位	ルピア	小計
1991年5月9-12日	コトパンジャン現地調査費用			
	交通費	1台×4日	250,000	1,000,000
	食費、宿泊代	2人×4日	100,000	800,000
1991年5月15-16日	コトパンジャン現地調査費用			
	交通費	1台×2日	250,000	500,000
	食費、宿泊代	4人×2日	100,000	800,000
1991年5月20-21日	コトパンジャン現地調査費用			
	交通費	1台×2日	250,000	500,000
	食費、宿泊代	3人×2日	100,000	600,000
1991年6月2-3日	コトパンジャン現地調査費用			
	交通費	1台×2日	250,000	500,000
	食費、宿泊代	3人×2日	100,000	600,000
1991年6月4-13日	コトパンジャン現地調査費用			
	交通費	1台×1日	250,000	250,000
	食費、宿泊代	2人×10日	100,000	2,000,000
1991年6月17日-7月6日	コトパンジャン現地調査費用			
	交通費	1台×1日	250,000	250,000
	食費、宿泊代	2人×20日	100,000	4,000,000
1991年7月8-14日	ジャカルタ等への行動費用			
	交通費	2人	250,000	500,000
	食費、宿泊代	2人×7日	300,000	4,200,000
1991年8月2-6日	コトパンジャン現地調査費用			
	交通費	1台×5日	250,000	1,250,000
	食費、宿泊代	5人×5日	100,000	2,500,000
1991年8月12-18日	コトパンジャン現地調査費用			
	交通費	1台×7日	250,000	1,750,000
	食費、宿泊代	5人×7日	100,000	3,500,000
1991年8月20-30日	コトパンジャン現地調査費用			
	交通費	1台×11日	250,000	2,750,000
	食費、宿泊代	4人×11日	100,000	4,400,000
1991年9月1日.	コトパンジャン現地住民との会合			
	交通費	8人	50,000	400,000
	食費、宿泊代	8人	50,000	400,000
1991年9月2-9日	ジャカルタへの行動費用			
	交通費	10人	150,000	2,750,000
	食費、宿泊代	10人×8日	300,000	24,000,000
1991年9月4-5日	コトパンジャン現地調査費用			
	交通費	1台×2日	250,000	500,000
	食費、宿泊代	2人×2日	100,000	400,000
1991年9月13-15日	コトパンジャン現地調査費用			
	交通費	1台×3日	250,000	750,000
	食費、宿泊代	2人×3日	100,000	600,000
1991年10月.	コトパンジャン現地住民との会合			
	交通費	10人	50,000	500,000

	食費、宿泊代	10人	50,000	500,000
1992年3月.	コトパンジャン現地調査費用			
	交通費	1台×3日	250,000	750,000
	食費、宿泊代	3人×3日	100,000	900,000
1992年9月.	コトパンジャン現地調査費用			
	交通費	1台×3日	250,000	750,000
	食費、宿泊代	3人×3日	100,000	900,000
1993年4月.	コトパンジャン現地調査費用			
	交通費	1台×3日	250,000	750,000
	食費、宿泊代	4人×3日	100,000	1,200,000
1993年6月.	コトパンジャン現地調査費用			
	交通費	1台×2日	250,000	500,000
	食費、宿泊代	3人×2日	100,000	600,000
1994年	コトパンジャン現地住民との会合			
	交通費、食費、宿泊代			1,000,000
1998年6月.	県知事庁舎へのデモ行動費用			
	交通費、食費、宿泊代			3,000,000
1998年7-8月	メダンでの村落調査員のワークショップへの住民派遣費用			
	交通費	2人	150,000	300,000
	食費、宿泊代	2人×7日	150,000	2,100,000
1998年9月.	タンジュンパウ村における農民組織設立費用			
	交通費	1台×3日	300,000	900,000
	食費、宿泊代	3人×3日	100,000	900,000
1998年11月	共同開発プロジェクト費用			
	交通費	1人×1カ月		1,000,000
	プロジェクト費用			149,900,000
1998年12月.	ジャカルタへの行動費用			
	交通費	5人	200,000	1,000,000
	食費、宿泊代	5人×5日	150,000	3,750,000
1998年12月15-17日	バダンでの農民組織大会参加費用			
	交通費	4人	50,000	200,000
	食費、宿泊代	4人×3日	100,000	1,200,000
1999年1-5月	訴訟準備活動費用			
	交通費	5人		5,000,000
	食費、宿泊代	5人		3,000,000
	フィルム・VCDの作成活動費用			
	交通費、食費、宿泊代	3人		3,000,000
2001年5月.	コトパンジャン現地住民との会合			
	交通費、食費、宿泊代			2,000,000
2001年6-7月	日本へのキャンペーン準備活動費用			
	交通費、食費、宿泊代	3人		2,000,000
2002年2-4月	コトパンジャンダム被害者住民闘争協議会設立の準備活動費用			
	交通費、食費、宿泊代			3,000,000
2002年5月26-28日	コトパンジャンダム被害者住民闘争協議会住民大会開催費用			
	交通費	130人		6,190,000
	食費、宿泊代	130人		18,146,750

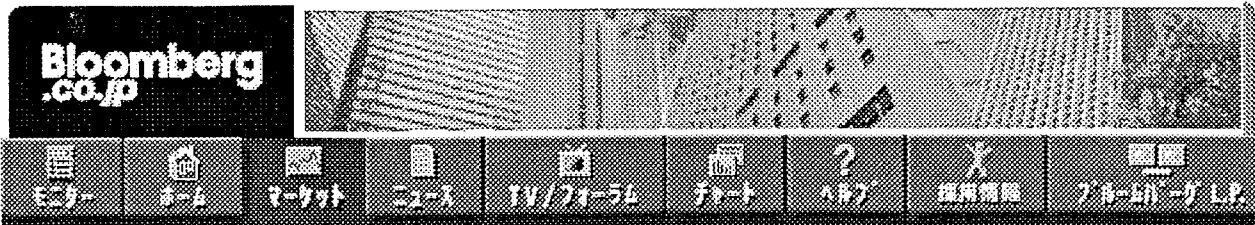
	資料、道具代 出版物 電話代 楽団費用	130人		2,540,125 945,000 541,189 1,100,000
2002年8月.	日本への渡航のための準備活動費用			
	交通費、食費、宿泊代	3人		1,500,000
2002年10-11月	日本への渡航のための準備活動費用			
	交通費、食費、宿泊代	4人x2日		2,000,000
2003年2月	コトパンジャンダム被害者住民闘争協議会との会合のための費用			
	交通費、食費、宿泊代	2人		400,000
2003年2月28日	アドボカシー交通費			4,447,400
2003年3月	コトパンジャンダム被害者住民闘争協議会との会合のための費用			
	交通費、食費、宿泊代	1人		200,000
2003年3月24日	訪日の出国税、空港税			1,100,000
2003年3月24日	日当			2,275,000
2003年5月	タンジュンパウ村における会合 (3回)			
	交通費、食費、宿泊代	2人		750,000
2003年5月22日	アドボカシー			8,175,000
2003年6月	タンジュンパウ村における会合 (2回)			
	交通費、食費、宿泊代	2人		500,000
2003年6月30日	訪日ビザ			250,000
2003年7月2日	日本の訴訟のための訪日			3,356,250
2003年7月4日	日本の訴訟の記者会見資料コピー			74,350
2003年8月15日	アドボカシー 交通費(ジャカルターパダン)、宿泊代			7,345,000
2003年8月15日	アドボカシー会議費			5,220,500
2003年8月21日	アドボカシー会議交通費			5,220,500
2003年8月27日	アドボカシー			1,550,000
2003年9月4日	訪日ビザ、空港税			1,500,000
2003年9月10日	日当			1,489,250
2003年9月10日	組織化費			8,140,000
2003年10月	タンジュンパウ村における会合			
	交通費、食費、宿泊代	2人		400,000
			合計	338,406,314

事務所費用

年	費用内訳	単位	ルピア	小計
1991年	事務所家賃	1年	250,000	250,000
	電話代	12カ月	750,000	9,000,000
	電気代	12カ月	30,000	360,000
	水道代	12カ月	25,000	300,000

1992 年	事務所家賃	1 年	250,000	250,000
	電話代	12カ月	800,000	9,600,000
	電気代	12カ月	30,000	360,000
	水道代	12カ月	25,000	300,000
1993 年	事務所家賃	1 年	250,000	250,000
	電話代	12カ月	500,000	6,000,000
	電気代	12カ月	30,000	360,000
	水道代	12カ月	25,000	300,000
1994 年	事務所家賃	1 年	250,000	250,000
	電話代	12カ月	700,000	8,400,000
	電気代	12カ月	30,000	360,000
	水道代	12カ月	25,000	300,000
1998 年	事務所家賃	1 年	2,500,000	2,500,000
	電話代	12カ月	300,000	3,600,000
	電気代	12カ月	75,000	900,000
1999 年	事務所家賃	1 年	2,500,000	2,500,000
	電話代	12カ月	450,000	5,400,000
	電気代	12カ月	75,000	900,000
2000 年	事務所家賃	1 年	2,500,000	2,500,000
	電話代	12カ月	700,000	8,400,000
	電気代	12カ月	75,000	900,000
2001 年	事務所家賃	1 年	2,500,000	2,500,000
	電話代	12カ月	700,000	8,400,000
	電気代	12カ月	75,000	900,000
2002 年	事務所家賃	1 年	6,500,000	6,500,000
	電話代	12カ月	1,200,000	14,400,000
	電気代	12カ月	75,000	900,000
			合計	97,840,000

総合計 436,246,314ルピア



検索結果
証券コードを入力

銘柄検索

地域別為替相場



- マーケット
- ニュース
 - 国内トップニュース
 - 海外トップニュース
 - 政治経済
 - 株式個別銘柄
 - 産業・企業
 - 経済指標
- 株式
 - 投資信託
 - 主要株価指数
 - JASDAQ 株価インデックス
 - 東証1部銘柄ランキング
 - 東証2部銘柄ランキング
 - 大証1部銘柄ランキング
 - 大証2部銘柄ランキング
 - 店頭銘柄銘柄ランキング
 - 商い総合ランキング
- 国債
 - イールドカーブ
- 国為替
 - 為替レート
 - 主要クロスカレンシー
 - 為替レート計算機

通貨を選択

日本円 (JPY)

表示

外国通貨建

換算する

主要通貨 アジア太平洋: 地域別為替相場

通貨	ティッカー	価格	前日比	変化率
シンガポールドル	SGD	0.01595	0	0
日本円	JPY
韓国ウォン	KRW	10.8320	0.02805	0.25968
台湾ドル	TWD	0.31298	0.00046	0.14717
香港ドル	HKD	0.07134	-0.0000	-0.0032
タイバーツ	THB	0.36707	0.00004	0.01252
マレーシアリンギ	MYR	0.03495	0	0
インドネシア ルピア	IDR	78.0287	0.02299	0.02948
オーストラリアドル	AUD	0.01285	-0.0000	-0.0069
ニュージーランドドル	NZD	0.01469	0.00000	0.01597
インド ルピー	INR	0.41661	0.00069	0.16588
フィリピンペソ	PHP	0.50754	-0.0017	-0.3521

15分遅れで更新されています。



©2003 Bloomberg L.P. All rights reserved. サービスの要項, プライバシー保護方針, 商標について.

このサイトのすべての内容に関する著作権は、ブルームバーグL.P.に帰属しています。データの無断掲載および無断転載は禁止しています。

